

---

# 奇神譚

日比谷碌樹

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

奇神譚

### 【Nコード】

N6015J

### 【作者名】

日比谷碌樹

### 【あらすじ】

娘の様子がおかしい。なにかに魅入られたように夜な夜な家を出、徘徊する……。そしてとうとう……。山際教授の旧友からの調査依頼を受け、生殖器信仰の残る東北・岩手へ向かった守門。同地へ偶然旅行に来ていた幼なじみの阿夜とその恋人、黎をも巻き込み、奇妙なフィールドワークが始まった。考古学者・諸橋守門の紡ぐ現代御伽草子、第三弾。

## 序章（前書き）

実在の神社や施設等が出てきますが、むろん、すべてフィクションです。

## 序章

潮に揺蕩<sup>たゆた</sup>っていた身体を引き起こされるような感覚を感じ、女は目を覚ました。

朝はまだ訪れてはいず、部屋は真つ暗だった。おそらく午前一時か、二時。深夜であることには疑いない。

布団の上に起き上がり、襖を開ける。廊下へ出る。茫洋<sup>ぼうやう</sup>とした眼差し。にも関わらず、堅固たる足取り。

行かなくちゃ。

神様が呼んでいる。

この家に御座<sup>おわ</sup>す雄<sup>お</sup>の神と、あの地に御座<sup>お</sup>す雌<sup>め</sup>の神が。私のことを。私を欲しいと宣っている。

母のように、いや、母よりも私のことを……。

お父さんには知られないように。もし知られたら、疎んじられてしまう。いまより、もっと。

早く、早く、行かなくちゃ。

夜が明ける前に。

女は寝間着姿で玄関に向かい、戸を開け、闇の中へ消えた。



## 第一章 盛岡行 1

そもそも発端は、例によつて諸橋守門もろはしもんの悪戯好きの恩師、山際教やまぎわ授のある発案であつた。秋も深まり始めたその日の午後、研究室の自分の椅子に坐り、温ぬるんだ煎茶をすすりながら山際は言つた。

「諸橋君。非常に残念なんだが、私は参加できそうにないよ。君を無理に引き込んでおいて、いまさら申し訳ないんだが」

「ああ……例の件ですか。なにか、ご都合が悪く？」

守門はレポート用紙から顔をあげて訊ねた。先日学生から回収した課題である。このところ、自身の研究に没頭する日々が続いたせいで、机の上には分厚い紙の山が幾束も鎮座している有様だ。

「いやあ その、ほら、来月九州であるだろう？ 学会あれが」

「え？ でも、教授は今回は出席を見送つたんではありませんでしたか。春に出て論説は発表済みだからつて」

山際は教授陣の中でも学会嫌いで有名だ。なにしろ口癖は「あんなもん、一年に一回出りやおつりが来る」なのだから。守門の言葉に、山際は決まり悪そうに視線を逸らした。

「うん、まあその。いろいろと付き合いがあるんだよこれでも」

「……また招よばれましたね。さしずめ、九州立心大きゅうしゅうりっしんだいの天野教授にでも」

守門は鋭く指摘した。山際はとぼけた表情であらぬ方角を見つめている。図星のようだ。

山際暢のほろは、学会嫌いではあるが顔の広い不思議な男で、同業者の友人が日本中 いや世界中に存在している。そのネットワークが来月に向けて発動されたというところか。

「行かれるのはかまいませんが、あまり羽目を外さないでくださいよ。毎回多方面にフォローするのはこちらなんですから」

愛弟子の説教癖に、師匠は渋い顔だ。小さな声でぶつぶつと独り

「ごちる。」

「まったく……どうしてこうこの男は、カタいというかなんというか……安寿君<sup>あんじゅ</sup>だってそれじゃさぞ窮屈<sup>きうくつ</sup>だろうに」

「なにかおっしゃいましたか」

年齢の離れた幼なじみ、高部阿夜<sup>たかべあや</sup>を引き合いに出され、守門の声色がいっそう冷ややかになる。山際は慌てて話題を元に戻した。

「まあそういうわけで、例の岩手行きね。どうもしばらく手が空きそうになくってね。それで」

「わかりました、それじゃ私一人で」

「いやいや、一人じゃなにかと不便だよ。だからね諸橋君、今回は彼女を連れて行きたまえ」

守門は眉根を寄せた。警戒するように、なぜか小声で問い返した。

「……彼女、といいますと……」

「小宮山君<sup>こみやま</sup>だよ。ほかに誰がいるんだね」

山際は呆れたように彼の教え子を見ている。

哉子<sup>かなこ</sup>と、二人で。考えただけで守門の腋下を厭な汗が濡らすようだった。

「いや、しかし……調査の対象がああいう性質のもんですし……女性を同行させるのはいかなものかと」

形勢逆転 守門の弱弱い反論は、果たして一刀両断された。

山際は憤然と正論をぶった。

「なに言ってるんだね諸橋君。どんな内容だろうが研究者たる者、そんななまくらな心構えで務まるとでも思ってるのかね。それに小宮山君は気丈な女性だ。彼女なら問題あるまい。私が保証するよ」

「それは……しかし、正直言って私は彼女がその……」

「私がどうかしました？」

語尾を濁す守門の背後から、突如明朗な声がした。山際がわざとらしげに顔を綻ばすのがわかり、恩師ながらなんとも憎たらしい。

「おお、小宮山君。実は、君にぜひ頼みたい仕事があつてね」

「もちろんお受けしますわ。どういった内容ですか？」

ハイヒールの音も高らかに近づいてくる哉子。守門はため息をついた。まったく、この教授は……。

混乱を見せ始めている事態を明らかに面白がっている山際教授だった。



## 盛岡行 2

十月某日、東京発の東北新幹線「はやて一号」。守門とその後輩でもあり、元教え子でもある小宮山哉子は東京駅で待ち合わせをし、七時少し前にこの電車に乗り込んでいた。

「岩手も良いお天気だいいですね。歩き回るのに、雨じゃあつらいもの」

向かい合って腰掛けた哉子がにこやかに言う。ワインレッドのタートルネックにはしばみ色のタイトスカート、それに同系色のレザーコートとジョッキーマグを軽やかにまとってホームに現れた哉子は、さながら女優めいた華やかさを振りまき、周囲の視線を集めていた。しかし、晴れやかな彼女とは裏腹に、この同行者の表情は相変わらずすくねない。

「君もいろいろと忙しいだろうに。まったく、山際教授はなにを考えてるんだろうな」

不興げな守門だが、哉子はまったく意に介していない様子である。「フィールドワークはなにより大事な作業だって先生いつもおっしゃってるじゃないですか。それに私は山際教授を尊敬してますし、お手伝いができるなら光栄な話ですわ」

守門はため息を吐き出しつつも、気分を切り替えることにした。とにかく、この仕事を一刻も早く終えてしまうことだ。乗車前に買っておいた缶コーヒーを一口含んでから、彼はおもむろに切り出した。

「あー……君は、今回の調査内容についてはもう教授から聞いている？」

「ええ。大体のところは」

「では、『みみぶくろ耳嚢』のごんせいしん金精神のくだりについてはすでに目を通した？」

「ええ」

哉子は当然とばかり肯いた。

津輕の豪士の語りけるは、津輕の道中にカナマラ大明神とて、黒銅にて拵こしらへたる陽物ようもつを崇敬し、神體と尊みける所あり。いかなる譯わけやと尋問たずねければ、古老答て、いにしへ此所に壹人の長ありしが、夫婦の中にひとりの娘を持、成長に随ひ容顔美麗にして風姿艶なる事類ひなし。父母の寵愛斜ならず、近隣の少年爭ひて幣を入、妻にせん事を乞ひ求めけるが、外に男子もなければ聲むこを撰て入れけるが、いか成故にや、婚姻整ひ侍る夜即死しけり。

(中略)

或男此事を聞て、我聲にならんとて、黒銅にて陽物を拵へ、婚姻の夜闇に入て交りの折から、右黒銅を陰中に入れしに、例の如く霧雨に乘じ右黒銅物に喰つきしに、牙悉く碎散くだけちりて不殘のこらず拔けるゆへ、其後は尋常の女と成りし由。右黒銅の男根を神といわひて、今に崇敬せしと語りけり。

『耳囊』は、江戸時代の旗本奉行・根岸鎮衛ねぎししずもりが書いた、いわば隨筆集である。江戸中期から後期にかけて集められた千篇しよつわもの小話しょうわがまとめられており、その内容は、徳川家光など実在の有名人物に関するものから呪いまじなを含む民間療法、それに天狗や鬼火といった迷信奇談の類まで多岐に渡る。

「『耳囊』にはほかにも一つ、この金精神にまつわる話が入っているが、そちらは今回は調査対象外だね」

「それじゃ、おもに東北の金精信仰について調べていくということですね」

哉子はさりとてのけた。守門は曖昧に答えた。

「ああ、まあそうなるね。もう一方の『陽物を祭り富を得る事』の舞台は、西国　要するに九州で、とても一度にはカバーしきれないから」

「あら。私としては完璧を期すためにもそっちへもぜひ訪れたかったわ。先生とご一緒なら、多少遠かろうが全然かまわないのに」

嫣然と笑む哉子に、守門はわざとらしく咳払いをし、聞こえないふりをした。

まったく、先が思いやられる、と胸のうちにばやきながら。

「見て見て黎！　紅葉超きれいだよ、ほら！」

車窓に張り付くようにして阿夜は歓声をあげた。そのボーイフレンド、西行黎は、さきほどから文庫本に目を落としたままだったが、阿夜の声に促され、外の景色にゆっくりと目を遣る。走り去っていく景色の中で、鮮やかな朱色や山吹色が美しい染料のように浮かび上がる。

「ああ、ほんとだ。やっぱりこっちは寒いだけあって色づきが早いね」

「ねっ。やっぱり来てよかった！　みんなが来れなくなっちゃったのは残念だけど」

座席に坐ったまま阿夜は伸びをした。新幹線は快適この上ないが、自由に動き回れないのはやはりストレスだ。

「疲れた？」

その様子を見、黎はやさしく阿夜を気遣う。阿夜は元気よく首を振った。

「全然。ああすっごい楽しみ！　二日しかないから詰め込みになっちゃうけど、あたし岩手って初めてだし超興奮してる」

「ぼくも盛岡には二度来ただけだな」

そついうと、黎はふたたび手元の文庫本に目を向けた。興味を惹

かれ、阿夜が覗き込む。

「ねえ黎、さつきからなに読んでるの」

黎は文庫本を目線まで持ち上げてみせた。若干黄ばんだ表紙には、あまり見慣れない漢字が踊っていた。

「『耳囊』だよ。阿夜も読んでみる？」

「ミミブクロ？ それって新耳袋みたいな話？」

「うーんまあ、近いかもね。ほら」

手渡された本のページをぱらぱらと繰る。しかし、阿夜はすぐに放り出した。

「だめだめ、あたし黎ほどインテリジェンス高くないもん。昔の字ばかりで読めないよこんなの」

黎は苦笑し、阿夜のひざから本を取り上げた。

「でもおもしろい話もあるんだよ。この『金精神』なんかは、これから向かう岩手方面に伝わる伝承を書いたものだしね」

「へえ、そうなんだ。コンセイシン？ それってどんな話なの」

「知りたい？」

黎が悪戯っぽい笑みを浮かべている。その表情に阿夜はそそられ、彼を急かせた。

「うん、知りたい！ 教えて」

「いいよ。……昔、現在の青森のあるあたりで、黒い銅でできた棒のようなものを金摩羅大明神と呼んで信仰している人たちがいた。その由来はこうだ。それよりもさらに昔の時代に、その地方にはある長者夫婦が住んでいて、美人と評判の一人娘に婿を取らせることになった。ところがその婿は、初夜の晩、急に死んでしまう。なにがあったのか、娘自身もわからない。そのあとにも何人も婿を迎えるんだけど、みんな死ぬか、そうでない者は恐怖で実家に逃げ帰っちゃうんだ」

「ええ……それってホラー？ なにがあつたの一体」

「生きて逃げ帰った男に後日真相を聞くと、娘のあそこには鬼のよくな牙が生えていて、自分のものを喰いちぎられそうになったって

言うんだ」

グロテスクな展開に、阿夜はしかし、瞳を輝かせた。「まじで？  
その子ちよつとすごくない」

黎は淡々と語り続ける。

「で、ある時、一人の男が現れ、もしかしても娘の婿になる。娘の両親は、どうせこの男も顛末は同じだろうと期待してないんだけど、その夜、男は挿入のまさにその瞬間、娘のあそこに黒い銅でできた棒を突き刺すんだ。

すると、さすがの鬼の牙も砕けて折れてしまつて、やっと娘は普通にセックスできるようになり、めでたしめでたしって話」

奇想天外なストーリーに阿夜は噴き出した。

「こわつ。なにその話！ でもおもしろいけど」

「だろ？ 盛岡市に巻堀神社まきぼりつてところがあるんだけど、そこが東北に伝わるこの伝承のルーツだとも言われてるらしいよ。時間があれば、そこにも寄つてみたかったけどね」

阿夜は肯いた。旅程は一泊二日のため、廻れるところはそう多くないのだ。到着後はまず盛岡八幡宮に参詣し、続いて盛岡城址を散策したあとは宮沢賢治ゆかりの文化施設「いーはとーぶアベニユー」を見学。お土産もぬかりなくチェックしたら冷麺を食べて、それから黎が押さえてくれた本日の宿、大宮温泉郷の「若久喜旅館わかぐき」にチェックイン。ひたすら源泉かけ流しの温泉を楽しもう、という趣向である。

「恵良えらやギャビイさんも温泉大好きなのにね。露天貸切えんてんにしてみんなで遊びたかったな」

「貸切なら二人でもできるよ。ぼくはそのつもりだけど」  
黎のせりふに、阿夜の頬が赤くなる。

「ま、まあ、それはおいといて。あ、あたしちよつとトイレ行つてくるね」

ぎこちなく立ち上がり、通路へ抜ける。胸の中だけで小さく独りごちていた。 まったく、黎はこういうこと、超素スで言えちゃう

んだから……。

観光シーズンの週末とあって、車内はかなり混んでいた。空席はほとんど見当たらず、大きな荷物を提げて行きかう乗客をなんどもやり過ごしながら阿夜はトイレのある車両後尾へ向かった。

「それじゃあ、巻堀神社へは行かないってことですか」

哉子は不服げに目の前の青年を見た。彼は、資料から目を上げようとせず小さく肯くのみだ。

「でも、ここが東北における金精信仰の大本なのでは」

「確かにそうだが、そもそも生殖器信仰フェリスズム」より正確に言えば、フアリシズムフェリスズム「男性器崇拜、ヨニシタス」女性器崇拜である」は日本全国どこにでもある。そういう意味では、巻堀がこの信仰の発祥地というわけでもないしな」

「しかし、山際教授のお話では、原点近辺からの調査が重要とのことでした。私もそのつもりで用意を……」

守門は息をつく、哉子を見据えた。

「教授からはほかのことは聞かなかった？」

哉子は形の良い眉を寄せた。

「ほかのこと？ なんです？」

「聞いてないのか。まったく、あの人ときたら」

守門は眉間を押さえた。そして渋々ながら口を開こうとした時だった。

通路前方から一人の女性が歩いてくるのが見えた。ゆるくウェーブのかかった長い髪、均整の取れた細い肢体、人形のような長い脚、黒のニットに千鳥柄のショートパンツ、流行の腿まである黒いブーツ。そして、守門のよく知る、吸い込まれそうな大きな瞳。

「……阿夜？」

互いに気づいたのはどうやら同時だったらしい。阿夜は固まった

ように立ち止まり、ぽかんと口を開けて守門を見た。

「え……お、お兄ちゃん？　嘘、なんでこんなとこにいるの？」

守門は立ち上がり、通路へと出た。

「それはこっちのせりふだ。なんで君がここにいるんだ？　一人なのか？」

「いや、違うけど……お兄ちゃんこそ」

「私は調査のために　とにかく、こっちへ来なさい」

「ちよつ、痛いつて、お兄ちゃん」

守門は阿夜の右腕をつかむと、強引にデッキへと向かった。同行者である哉子には目もくれずに。その哉子は、自他ともに認める才女には似合わぬ啞然とした顔で、二人の後ろ姿を見送っている。

デッキは幸い　というべきか　無人だった。守門の拘束から逃れようと、阿夜は懸命に腕をねじった。

「痛い、痛いつてば！　いい加減手離してよっ」

守門はようやく阿夜の腕を離れたが、彼女の華奢な身体を乗降扉に押し付けるようにし、その視界を塞いで立ちはだかった。隙をついて逃げられないためだ。

「さて、それじゃ聞かせてもらおうか。なんで君がこんなところにいるんだ？　私はなにも聞いていないが」

「そりゃ、言つてないから当然じゃん」

むくれて言い捨てる阿夜を、守門はさらにきつく睨んだ。

「阿夜」

観念したのか、がらりと明るいう口調になって説明を始める阿夜。

「その、旅行よ、旅行。ほら、先月の終わりにお兄ちゃんがお店にガルシア来たとき、ギャビイさんが言つてたの覚えてない？　紅葉狩りがてら温泉行きたいって」

「先月の終わり？　……ああ」

それは九月の最終週の土曜のことだ。久しぶりに時間の取れた守門が夜半、阿夜の勤め先である「カバレ・ガルシア」キャバレーに顔を出すと、その日はあまり客がいなかったためか、中央のテーブルにスタッフ

が数名集まって閑談中だった。

「あの時さ、ギャビイさんと恵良が盛り上がったたじゃん。北海道で温泉とグルメ三昧いいねって」

「そういえば……そうだったかな。いや、ならどうしてこの『はやて』に乗ってるんだ。北海道は中止になったのか？」

「だってそのつもりで計画練ってたら、黎が、どうせ行くなら東北の方が、泉質のいい温泉取り取りみどりだって言うから。それで変更になったわけ」

「じゃあ、ギャビイさんや曾我君たちも一緒なんだな」

安堵の表情を浮かべる守門だったが、阿夜は妙に落ち着かない様子で視線を泳がせている。これは、嘘を隠している時の、彼女の子どもの頃からの癖だ。胸騒ぎを覚え、守門は詰問した。

「阿夜。正直に答えなさい」

「……だって、ひどいんだよギャビイさんも恵良も。言いだしつぺのくせに、二週間前にドタキャンかましてくるんだもん。ギャビイさんはニューハーフ仲間とタイに行くことになったっていきなり言い出すし、恵良も急に遠恋中の彼氏と会えることになったからパスだって。それに僣<sup>しんぷ</sup>さんも、実家で急な法要が入ったとかで……だから、その……」

「さつき、一人じゃないって言ってたな。じゃあ誰と来たんだ」

阿夜は極力顔を伏せがちにし、消え入るような声でつぶやいた。

「……黎と」

「なんだって？ 聞こえなかったぞ。ちゃんとはっきり言うんだ。

阿夜」

阿夜は顔を上げると、守門を睨み返し、やけくそのように怒鳴った。

「もう、うるさいな！ 黎と来たって言ってるでしょ。彼氏なんだから普通じゃん。そこどいてよ、あたしトイレに行くとこだったんだから！」

阿夜は渾身の力を込めて守門の身体をつきとば そうとしたが、



いかんせん厳然たる体格差のために目の前の城壁はびくともしない。逆に守門に手首を握られ、またも身動きを封じられてしまった。

「痛いってば、もう！ 離してよ」

「阿夜、西行君と旅行ってまさか、泊まりじゃないだろうな。そんなことは、君の保護者としてこの私は断じて赦すわけには」

守門の目が据わっている。こうなるともう、なにを言っても無駄だ。阿夜は絶望的な気分であめいた。

「お兄ちゃんの許可なんて要らないでしょ！ あたしが誰と旅行に行こうが。大体なによ、お兄ちゃんだってあの女の人と一緒になんじやん。あたしのことはっかり言えんの」

思わぬ反撃だったが、守門は責めの手を弛めない。

「私は学術調査のために来てるんだ。小宮山君は助手として同行しているだけだ。話を逸らすんじゃない、阿夜。とにかく、日帰りならまだしも、西行君と泊まりで温泉なんてそんな、……婚前旅行みたいな話が見逃せるか！ 次の停留 じゃない、駅で降りて東京に帰るんだ。いいな」

守門の通告に阿夜は青くなった。このままでは本当に「強制送還」されてしまう。

「じよ、冗談じゃないわよ！ お兄ちゃん正気？」

「正気じゃないのは君の方だろう。西行君はどこにいるんだ、君の保護者として言っておきたいことがある。座席に案内しなさい、阿夜」

阿夜の手首を捕らえる力がいつそう強まった。たまらず悲鳴をあげようとして口を開きかけた時だ。

「それくらいにして離してあげてください、先生」

涼やかな声に虚を衝かれ、守門は咄嗟に振り返っていた。学内一の才媛が、呆れたように苦笑いしながら通路扉にもたれて立っている。

「中々戻られないので、なにかあったのかと思って来てみたんですけど。いまのおっしゃりようはあんまりです、先生。それに、いく

ら保護者代わりとはいえ、女性に力ずくなんてスマートな振る舞いとはとても思えませんわ」

守門は露骨に渋い表情を浮かべた。

「しかしね、小宮山君。君も聞いていたのかもしれないが、こういう事態は」

「ボーイフレンドと旅行に行くってことでしょうか？ どこに問題があるんですか」

胸の前で腕を組み、あくまで力強く言い放つ哉子。その自信に満ちた迫力に、守門の勢いはどんどん殺がれていく。

「阿夜さんはもう大人なんだし、プライベートにそこまで介入するのいかなものかしら。大体、いつもクールな先生らしくありませんわ、こんな公共の場でそこまで取り乱されるなんて」

「……」

先ほどまでの剣幕はどこへやら。惘然としながらも守門はようやく阿夜の手首を離れた。阿夜は素早く守門から飛び退ると、彼に向かつて思いきり舌を出し、毒づいた。

「お兄ちゃんのばか！ 最低！ 大っ嫌い！」

「あ、阿夜！ 待ちなさい」

守門は慌てて彼女へと手を伸ばしたが、時すでに遅し。阿夜はすりとデッキを飛び出し、一目散に通路を駆けていつてしまった。

残された守門は、なんともぼつの悪い思いで佇んだままだ。哉子は、笑いを堪えるように目を細めながら彼を促した。

「私たちも席に戻りませんか？ 先生」

「そうだな。……すまない、小宮山君」

「なにがですの」

「その……身内の揉めごとに巻き込むというか、とんだ失態を見せてしまった」

哉子は微笑んだ。思いがけない表情に守門は戸惑う。

「失態なんて。普段は見られない姿が拝見できてうれしくらいです。私だけじゃありません？ 先生があんなに我も忘れて怒鳴った

り、必死になったりするところを間近に見た人間なんて、学内でも  
哉子の言葉は慰めにはならなかった。守門は沈鬱に黙り込んだ。  
「研究者失格だな。どんな時でも冷静沈着に対象物と向き合えるよ  
うに、常から心がけてはいるんだが」

「先生……」

哉子の胸のうちが甘く疼いた。どうしようもなく彼に惹かれてい  
ることをまたしても自覚した。

この人が欲しい。心から。

そう。……どんな手段を使っても。

誰にも届かないようなかそけき声が、この時彼女には聞こえた気  
がした。

## 第二章 葛原家の事情

定刻ぴつたり 九時半過ぎに、「はやて」は盛岡駅へと到着した。守門と哉子は足早に改札を抜け、東口のタクシー乗り場へ向かった。ちょうど客が切れたところで、すぐに一台のタクシーの後部ドアが開いた。

「どちらまで」

守門は手帳に挟んでおいたメモを運転手に渡した。

「この住所までお願いします」

初老の運転手は、メモを一瞥すると、得心したようにつぶやいた。「ああ、葛原邸ね。お客さん、知り合い？ ご親戚かなにかですか」「ええ、まあ」

タクシーが静かに動き出す。哉子は訝しげに守門を見やった。

「先生、調査の対象地というのは、個人宅なのですか」

守門は軽く首を振った。しかし、それ以上は答えようとしなない。

「着けばわかるさ。多少込み入った話のようだね」

言うなり、腕を組んだまま目を閉じる。哉子はあきらめて車窓へと視線を移した。運転手の通りの悪い声がぼんやりと耳に入る。とりとめのない話し方だったが、東北訛りはさしてきつくはないようだ。「このあたりも変わっちゃったでしょ。昔からいる人なんかは言うよ、取り残される気がするって」

「そうなんですか。でも、歴史のある街だし、景観を守るための基準なんかはあるんでしょう」

哉子の言葉に、運転手は曖昧に首をひねった。

「京都やら奈良みたいに厳しいかどうかはねえ。ほら、お客さんさつき駅にいたでしょ。反対側の西口の方がね、いわゆる再開発地になつてて、まあ駅前つてのはどこでもそうみたいだけど。いまでーっかいビル建ててるところなんですよ」

「ビル？ 西口に？」

思索を解かれたのか守門が反応する。運転手はのんびりと続けた。  
「そうそう、高層ビル。五十階建ての。テナントやら事務所やらホテルやら、いろいろ入れる予定だつって、もうじきに完成するんですけどね。そんなもん建ててもねえ……採算取れるんだか」

守門は再び黙り込んだ。タクシーは市の中心街を抜け、山の手らしき界隈へと入っていき、やがて、高い白壁に周囲を囲まれた一軒の屋敷の前で停まった。平屋建ての数奇屋すきやぶしん普請で、いかにも良家の趣を漂わせている。先にタクシーから降り立った哉子は、門柱に掲げられた立派な表札を見、つぶやいた。

「葛原……先生、このお宅は……」

「地元の郷土史家である葛原氏の住まいだよ。山際教授の旧友の方だと聞いている。すまなかつたな、結果的にほとんど事態の説明もなしに連れてきてしまつて」

そう言いながら守門は呼び鈴を鳴らした。ノイズ混じりの、家政婦と思しき中年女性の声がすぐに応答した。

『はい。どちら様でしょう』

「東京から来ました諸橋と申します。本日、武人さんをお伺いするお約束をしております」

『あ、はいはい』

玄関格子が忙しなく開けられ、エプロン姿の五十代くらいの女性が見れた。七五三に配された十メートルほどの敷石を渡り、門扉の鍵を外すと二人を中へと招じ入れた。

「遠いところをわざわざ……お疲れでしょう。旦那様もう早くからお待ちですよ」

通された客間には、すでに一人の老人が座して構えていた。持病があるのか、それともほかの理由からか、顔色は青白くくすみ、目の下にはくつきりとクマが浮かんでいる。守門は下座に坐すると軽く礼をし、簡潔に訪問の口上を述べた。

「東亞大の諸橋です。この度は、お世話になります。こちらは後輩

の小宮山君です」

「小宮山哉子です。初めまして」

わけがわからないながらも、哉子は守門に倣って挨拶をした。老人は肯き、口を開いた。

「ようこそおいでくださいました。山際君からあなた方のことは聞いております。全面的に信賴して良いと」

「いえ、お力になれるかどうか。それで、お嬢さん　美春みはるさんは、まだ……」

「ええ……もう十日になりますか」

老人は沈痛な面持ちで視線を伏せた。守門は言った。

「葛原さん。あらためて、事件の概要あらましについて詳しくお教え願えますか。私が山際教授に最後に話を聞いてから、すでに数日経っておりますし……情報の確度を高めたいと思いますので」

「そうですね……ただ、正直、状況はあまり変わってはいないと言わざるを得ないのですが……」

守門に促されて彼の語った話の概要は、次の通りだった。

葛原家というのはここいら一帯では由緒ある名家として知られている。女系の家で、長女は代々婿を迎え、血筋を絶やさずにいまに至る。現当主の武人も、二十代半ばに葛原家の娘、苗子なえこと出会い、婿入りの形で結婚。十五年前に妻が病死し、一粒種ひとこめの美春も二十五歳で他家に嫁いだ。通いの家政婦と二人だけの、孤独で静かな生活がしばらくは続いた。

「ということは、美春さんには敢えて婿は取られなかったんですね。相槌とも疑問ともつかぬ守門の言葉に、武人は苦笑した。

「ええ。美春の夫については、私はなにも口出ししませんでした。家を継ごうが他所へ行こうが、どちらでもあの子の好きにすればいいと思いました。私自身入り婿ですから、もしかしたら自分の複雑

な私情が混じっていたのかもしれませんが。まああの子は、結果的にこの家へと帰ってくるようになりましたが」

その美春は、今年三十五になる。去年離婚し、嫁ぎ先の仙台から実家に戻ってきて以来、特に勤めに出ることもなく、家事手伝いをしながら気ままに暮らす日々を送っていた。子どもができなかったのも、これからの彼女を束縛するものは実質なものもないと言えた。美春は自由を謳歌し、元々興味のあった地元の民俗風習について修学を始め、自ら伝承の類を蒐集して廻るようになった。おそらく郷土史家の父親の影響も大きいのだろう。そこで武人は一葉の写真を取り出した。

「昨年、姪っ子が遊びに来た時に一緒に撮ったものです」

守門と哉子は同時に覗き込んだ。小学生くらいの活発そうな女の子と、黒く長い髪を後ろに縛り、質素なデザインの茶色のワンピースを着た細面の女性がそこにいた。長い睫毛に縁取られた黒目がちの瞳は理知的ではあるが、どこか淋しげな雰囲気をも同時に漂わせている。それにしても、三十代半ばとはとても思えない、少女のような清楚な美女だ。守門は言った。

「続けてください」

美春はフィールドワークに貪欲なまでの行動力を見せた。時には父である武人さえ範疇外の事象についても触手を伸ばし、やがて東北地方にさまざまな形で伝わる生殖器信仰を知り、強い関心を持つようになった。

「子どもを欲しがっていたのか……不憫な気がして、聞くことはしませんでした。そのせいだけでは無論ないのでしょうか」

武人はぼつりと付け加えた。

三ヶ月ほど前、美春は金精神にまつわるいくつかの神社や施設を見学に出かけ、夕方、帰宅した。異変が始まったのは、この日からだった。

「帰ってきたところを見るとね……どうも様子が変わなんです」

「心ここにあらず、という風情だったそうですね」

守門の言葉に、武人は肯いた。

「元々夢見がちな娘でしたから、よほど印象深いものでも見たんだろくらいに最初は思っていました。まあ確かに特殊な性質の神社でしょうし……正直、私はあまり感心しませんでしたよ。原始的な信仰であることはもちろん承知しておりますが」

武人は娘の最初の変化に気づきながらも、それが重大なものとは思わず放っておいたという。

「美春さんは、そのあと、ぱったり蒐集活動は止めてしまったそうですね」

「ええ。出かけていくところを見ると手ぶらなんです。いつも、ノートやらカメラやら持っていきますから。それがほぼ毎日手ぶらで家を出て、夜遅くまで帰って来ない。そのうち、私や娘を知っている方から、あの子が駅あたりで日がな一日ずうっと立っていたとか、煙突……だと聞いたんですが、いろんな場所の、それをじつと見つめていて、声をかけてもまったく反応しなかったとか、そんなことを言われるようになりまして。一度など、団地の給水塔に登ろうとしたらしいんです」

「給水塔……ですか」

武人の表情がつらそうに歪んだ。

「ここから五十キロほど北に工業団地がありまして、その中心に建っているんですよ。ありふれたものだと思うんですが、側面に一応梯子のような脚がかりが付いていて……それに登ろうとしているのを通りかかった地元の巡査が見つけたと。引き降ろしたところ様子が普通でないので交番へ連れて行って、しばらくしたらなにこともなかったみたいに名前を言ってね、それで帰ったというんですよ。葛原という姓から、あとで私のところに連絡が来ましてね。それで知ったんですが」

武人は言葉を切り、眉間を押さえた。その心中は察するにあまりある。

「私もいささか不安になって美春を観察するようにしていたんです



が。あれは、ひと月前でしたかね……」

その夜、美春が家を抜け出すのを、武人は気づかなかつた。十一時頃までは自室にいるところを確認していたので、まさかそのあとになくなるとは夢にも思わなかつたのである。

「それでは　深夜、お嬢さんは家を……？」

哉子が思わず口を挟んだ。

「そう思われます。どこへ行っているのか、あの子は明け方戻ってきました。表の通りをふらふら歩いているのを多喜子たきこさんが　ああ、先ほどの家政婦ですが、彼女が見つけて慌てて保護してくれたそうです。というのは、私はその日たまたま朝早くに用事があつて、美春がいけないのも知らず家を出ておりましたので」

「鍵は……玄関と門扉の鍵は、開いたままだつたんですか」

守門が訊ねると、武人は首を振った。

「閉まっていましたよ。ですから余計に頭にありませんでした。その時は、あの子が自分で鍵を閉めたか、或いは裏木戸からこっそり出ていったのか、どっちだったのかはいまではもうわかりません。ただ、それ一度きりではないんです」

「そういうことが、数度続いた……」

「ええ。おかしいことに、見張つていてもいつのまにか部屋から姿が消えているんです。眠つてしまつて、その間に出て行つてゐるわけでは絶対にありません」

なんとも不可思議な話に、哉子は困惑し、そつと隣の青年を見上げた。ここまでの話を守門は山際から聞いていたのか、顔色ひとつ変えていない。

「私もほとんど弱りきつて、医者に見せるべきか考え始めました。ところが十日前のことです。今度は美春は明け方になつても家に帰つてこなかつたのです」

「警察には、お届けにならなかつたんでしたね」

「はい。なにせ三十を越えたいい大人ですし、たかが一晩外泊あの子の様子を知らなければそう思われて終わりでしょう　した

くらいで警察がまともに動いてくれるとも思えませんでした。ただ、もちろん出来うる限り色々な方面に手を回して行方を捜しました。すると、意外なところから連絡があったのです」

「それが久利緒神社ですね」

守門は静かに言った。耳慣れない社名に、哉子は怪訝な表情を浮かべている。

「そうです。久利緒神社の宮司から電話がありました。あの子が……美春が、神社の奥宮にあたる祠に入り込んで、帰ろうとしないと」

「奥宮？ それに祠、ですか」

哉子の訝しげな声に、守門が答える。

「教授から聞いた話では、本殿の裏手に木造の祠があるらしい。その祠の謂れはあとで調べるつもりだが……それで、美春さんはいまもそこに？」

武人は沈鬱に頭を垂れた。その意味がわからず、哉子が守門に再び訊ねる。

「ど、どういうことですか？ まさか美春さん、その祠に立てこもってるってことですか？」

「それも十日もの間。　そうですね、武人さん」

「ええ……」

苦しげに声を絞り出す武人だったが、哉子には解せないことだらけだった。

「あの、失礼ながら、宮司の方はその……警察に連絡はされなかったんでしょうか」

武人はうな垂れたままわずかに首を振った。

「ここらは古い土地柄でして……この葛原家も、多少なりと寺や神社には所縁があります。久利緒神社とはそう懇意なわけではありませんが、美春がうちの身内と知って、騒ぎにならないよう配慮してくださいようです。それより以前に一度訪ねているはずなので、その時身元は伝えていたのかもしれませんが……とは言っても、あちらももう限界でしょうな」

「しかし、立てこもっているとはいっても、美春さんは女性でしょう。強引に連れ出すことも可能なのでは」

哉子の疑問に応じたのは守門だった。

「私も山際教授から話を聞いた時、そう思ったよ。だが、そもそもそれが可能なら、私たちがここに呼ばれることはなかっただろう」

「でも、なぜ……」

「開かないのですよ。その祠の扉は。誰がどうやっても」

武人が哀しげに哉子を見、言った。哉子はまたも混乱した。

「開かないって……内側から鍵でも？」

「鍵は外側に小さな錠が付いているだけです。なぜ開けられないのか、私にもまったくわかりません。あの日、私は連絡を受けてすぐにあちらへ飛んで行き、もちろん力づくであの子を引っ張り出すつもりでした。ですが、祠の扉はびくとも動かず、いや、扉だけではなく、祠全体がなにかこう……人智外の力で護られているかのような……とにかくあの子は出てきませんでした。声がしますから、確かに中にいるのはわかるのです」

武人は一息つくと続けた。

「私はなんとか美春を説得しようと、話しかけました。なぜこんなことをしているのかも詰問しました。しかし、あの子はまったく聞き入れず、それどころか、なにが可笑しいのか笑っているんです。さも楽しそうに。……ひょっとして、私の必死の姿が滑稽だったのかもしれません」

「そんな……」

哉子は絶句した。文字通り、かけるべき言葉が見つからなかった。そんな彼女の前で、武人はいくらか気を取り直したように言った。「古い友人である山際君に最初に助言を求めたのは、ここまでの状況になる前……あの子が夜家を抜け出すようになった頃です。普通ならカウンセラーにでも泣きつくところでしょうが、私はなぜかそういう気にはなれませんでした。別に色眼鏡で見ているわけではなく、あの子の変化の背後に、なにか 普遍的なというか、ある種

超自然的な力が存在しているような気が無性にしたんですな。それはいまもですが。ですから、警察や、そういった関係の助けを借りようとはいまさら思えないんですよ」

語り終えると、武人はそれきり押し黙った。守門と哉子もまた無言のまま、この家の哀れな主人を見つめた。どこか別の部屋に設えてあるらしい柱時計の、時を報せるかすかな音がした。

### 第三章 阿夜、お冠

ショルダーバッグの内ポケットから軽やかな電子音が響いている。阿夜は素早く携帯を取り出すと画面の表示に目をやった。

件名：さつきは悪かった

送信元は守門だ。しかし、阿夜は内容を見もせずに携帯を閉じ、わざと乱暴にバッグへ放り込んだ。

彼女はめずらしく本気で怒っていた。当分は守門の顔も見たくないし、話もしたくない。

「阿夜、ほら。これ君の誕生石だろ」

不意に黎の声がした。レジ近くにいた彼が、紫色の石の付いたアクセサリーを軽く振って見せている。

「あ、ほんとだ。アメジストだね」

阿夜は意識的に歓声を上げて、駆け寄った。テーブルズカットを施された紫水晶が可憐に揺れる愛らしいピアスだ。美しい輝きに見惚れていると、黎がこんなことを言うのが聞こえた。

「阿夜に似合うね。買ってあげるから付けてみなよ」

「えっ 黎、ちょっと」

黎は至極スマートに会計を済ませ、戸惑う阿夜にピアスの入った紙袋を差し出した。いつもと変わらぬ愛情のこもった態度に、なぜか胸の底から申し訳なさが入みあがった。黎はこんなに紳士的でやさしいのに、お兄ちゃんときたら……。

「ありがとう。……ごめんね、黎」

「え？ なにが」

黎はきょとんとしている。当然だ。新幹線の中での一幕を、彼は知らないのだから。

盛岡八幡宮の参道の土産物屋を出、タクシーをつかまえるために沿道に立つ。すぐそばのバス停では、地元の女子高生らしい数人の少女たちが楽しそうに談笑している。地方でも都市でも、こうした情景はなにも変わらない。

「……あの話、本当らしいよ。うちのいとこの学校の子が呼ばれたんだって」

「ええ、それやばくない？　じゃあその子、処女？」

「じゃない？　ってことはあ……」

少女たちは顔を見合わせて、悲鳴とも嬌声ともつかぬ声を上げている。ノスタルジーを誘われ、阿夜は聞くとともにしに彼女たちの姿を眺めていた。そんな阿夜に黎は声をかけた。

「阿夜、タクシー来たよ」

「あ、うん」

程なく視界に滑り込んできたタクシーに、二人は乗り込んだ。「盛岡駅まで行ってください」運転手に短く行き先を告げると、黎は阿夜を見て笑いかけた。

「疲れてない？」

「うん、平気。でもお腹すいちゃったね。冷麺楽しみ！」

阿夜も屈託なく笑ってみせた。が、黎はどことなく意味深な目で自分を見ている。

「ど、どうかした、黎」

「メール。先生からだろ？　返信しなくていいの」

阿夜はぎよつとして彼を見た。黎は口元に悪戯っぽい笑みを浮かべている。阿夜の肩から力が抜けていく。

「なんだ……もしかして全部知ってた？　<sup>み</sup>霊視したの？　黎」

黎は可笑しそうに声を立てた。

「うーん。大体ね」さらに続けて彼は言う。

「ごめん。気づかないふりを続けた方がいいかなとも思ったんだけど……阿夜の様子がちょっと気になったから」

阿夜は上目遣いに黎を窺った。

「じゃあ……新幹線の中で、あったことも……？」

後ろめたさがあるのか、すまなそうに肯く黎。阿夜は息を吐き出した。

「それなら、黎だって怒る資格あるんだよ。あたしだってまだ怒ってるんだから」

「ぼくが先生に？ どうしてさ。むしろ、言われても仕方がないと思うけど」

得心が行かない様子の阿夜に、黎は諭すような調子で続けた。

「だって先生にしてみれば、ぼくは彼の大事な妹　っていうより娘かな　を攫っていこうとしてる憎むべき男ってことになるだろ。先生がどれだけ阿夜を大切に思ってるかは、見てればわかるしね」

黎の言葉に、阿夜の頬が心なしに染まる。しかし、それとこれとは問題が別だ。

「そう……かもしれないけど、でも、あの監視癖と説教癖は正直引くな。大体ね、あたしのことなんかより、お兄ちゃんは自分のことをよっぽど心配しなきゃいけないのよ。もういい年なんだから」

黎はぷつと嘔き出した。

「いい年って。でも阿夜はいいの？　先生に恋人ができてモ」

「そりゃ……そりゃあ、正直ちよつとは淋しいかもしれないけど。でも、その方が健全でしょ、絶対。お兄ちゃんて黙ってればそんなに悪くないと思うのね、黙ってればだけど。せつかく若い子がいっぱい集まるところに勤めてるんだから、もっと積極的に相手探せばいいのに」

阿夜の遠慮のない物言いに、黎は苦笑を禁じ得ない。

「とにかくさ。返信くらいしてあげなよ。先生、ああ見えてナイーブだから、けっこう落ち込んでると思うよ」

「……」

阿夜は、わざとらしく頬を膨らませながら携帯を取り出した。そして大きな目をさらに見開いた。

「やば。　電池切れてるし」

携帯の液晶画面は、過疎村の夜道のごとく真っ暗になっていた。



## 第四章 久利緒神社 1

忘れ去られたような神社。久利緒神社というのは、まさにそんな社やしろだった。木肌のめくれた鳥居、参詣に訪れる者もほとんどなすような拝殿に続き、ごく小規模な本殿が現れる。そして、その後方に、奇妙にも奥宮と位置付けられているらしい朽ちた祠があった。

守門と哉子は、葛原邸を辞したあとにこの社を訪れ、社務所に出向いた。そろそろ七十に手が届こうという小柄な、齋王さいおうと名乗る宮司がすぐに現れた。どうやら武人から連絡を受けていたようだった。その武人本人は、心労からかここ数日体調が思わしくなかったため、二人に同行はせず報告を待つ形になっている。

「建立は明応元年、一四九二年になります。祭神は卷堀神社かんから勧請じようしました金精大明神様でございます」

齋王宮司は厳かに言った。

「本家の卷堀の方は、主神が替わっているそうですね」

守門の言葉を受け、宮司は肯いた。

「ええ、猿田彦命様さるたひこのみことと伊佐那岐之命様いさなぎのみことですね。明治政府の大教宣布のために、それまで祭神であった金精様を廃してしまったと聞いております。しかし当社は……」

宮司はそこで言葉を切った。哉子は、武人の話を聞いた時から気になっていたので訊ねた。

「あの祠は摂社せつしゃではなく奥宮扱いなのですか？」

宮司は厳然と肯いた。

「そうです。当社には摂末社せつまつしゃの類はございません」

「同じ敷地内に奥宮が存在しているというのには、なにが理由が？」

守門が代わって問いかける。

「私もはつきりとは存じておりません。ただ、元々あの 本殿よりもいまの奥宮の方が先に建造されたと、記録には残っているよう

です。分<sup>ぶん</sup>霊<sup>れい</sup>したばかりの当時は、もしかしたら奥宮の方が本殿だったのかもしれませんが。また、奥宮という名が残ったのは、おそらく……」

宮司はなにごとか思案するように言葉を切り、やがて続けた。

「……便宜上の都合に因るものかと」

守門は、老人の様子をじっと見つめながら本題について切り出した。

「ところで、葛原さんのお嬢さんの件ですが　美春さんはやはりいまもその奥宮に籠ったままなのですか」

宮司は肯いた。

「あなた方を奥宮にご案内することはできませんが、お聞き及びの通り扉を開けることは不可能です。それでよろしければ、行ってみられますか」

「ええ、お願いします」

三人は社務所を出、奥宮へ　境内の隅に建てられた小堂へ向かった。ほどなく木造の質素な殿舎が見えた。規模としては、よく家庭用に売り出されている簡易倉庫のような感じで、決して大きくはない。観音開きの扉には、武人が言っていたように金属製の南京錠が掛かっていたが、よく見ると足は<sup>ツル</sup>抜けていた。

「美春さん……本当にこの中に……？」

哉子は気味悪げにつぶやいた。幅が狭いので、入ることはできても、大人一人が横になるのに十分な大きさにはとても思えない。

「中を窺うことは可能ですか」

守門は宮司に訊ねた。老人は無表情に首を振った。

「ご覧の通り、木目に隙間がございますので……ただ、呼びかければ時折返答してくれることがあります。十日前に葛原氏がみえた時には、なにか笑い声のような声が聞こえましたね」

「あの……十日間、籠りつきりつてことは……当然、食事も摂らずに？」

恐る恐る哉子は言った。食事以外にも、生理的欲求の処理は一体

どうなっているのか　宮司は淡々と答えた。

「無論、飲まず喰わずです。排泄しもの方については、こちらからは知る由もありませんが……ただ、臭いなどはございませんから、まったくそういった欲求がなくなっているのでは」

哉子は呆然と祠を見つめた。その時、ごくかすかな声　女性の  
か細い笑い声が聞こえた気がし、不気味さに身体を震わせた。両腕を引き寄せるようにして自らを抱きしめる。隣の青年に抱きつきたい衝動をどうにか抑えた。

「それにしても……美春さん、中で一体なにをしているのでしょうか」

「わからない。内側に鍵などは？」

取っ手の感触を確かめるように触りながら守門は宮司に訊ねた。

「ございません。そこに付いているだけです」

「この錠は、常から外れていたのですか」

「いいえ。中には金精様が何体か安置されておりますので、見学者でもない限りは錠はかかったままにしております」

「というと、御神体をここに？」

守門は意外そうに宮司を見遣った。

「いえ……正確に言いますと、いわゆる本尊は本殿にございます。祭神の間というのがありまして、そちらに常設しておるのです」

守門は重ねて訊ねた。

「その御神体を拝見することは可能でしょうか」

宮司はしばらく無言だったが、やがて肯いた。

「本来は一般の方にはお断り申し上げておりますが……こういう事態ですから、やむを得ないでしょう」

彼は守門たちを先導して歩き出した。途中、大回りをして手水舎で手を清めると、いよいよ本殿に上がった。簡素な覆屋おおい（主に本殿を保護するために設けられている木造の塀のようなもの。社殿を覆うように外側を囲っている）の施された、ごくありきたりの社殿である。人気は妙になく、境内一帯になにかうら寂しいような空気が

が漂っている。哉子は一刻も早くここから立ち去りたい気持ちをなんとか堪えながら二人に続いた。

久利緒神社において「祭神の間」とは、本殿中央の空間を指して呼ぶ名称とのことだった。朱塗りの祭壇には確かに御神体がすなわち男性器を模った神像が安置されていた。

「これは……黒銅製？」

守門は訊ねた。『耳囊』ではそう伝えられている。ここは巻堀神社ではないが、しかしそれにしても目の前の「御神体」には、鈍い艶こそあれ伝説が語るような冥い輝きは見られない。宮司は表情を変えずに答えた。

「と、聞いております。なにしろ私の代に作られたというふうなものではございませんので」

「……」

守門はじつと御神体を見つめた。が、やがてあきらめたように目を逸らし、宮司に告げた。「けっこうです。ありがとうございます」

それを汐に三人は本殿を出た。守門は宮司に礼を述べ、もうしばらく社地を見学させて欲しいと申し出た。

「かまいません。なにか解決の緒端が見つかりますことを願っております」

宮司は相変わらず表情のない声でそう言った。

## 久利緒神社 2

二時間前に送信済みのメールの返事が未だに來ない。きつと怒りが解けないでいるのだらう。そうでないとしたら……。守門は軽く息をつき、携帯をたたむとポケットに仕舞った。

「ここの祭神を巻堀神社から勧請したというのは、いつごろの話になるのかしら」

哉子の声に、はつと我に返る。学者にとってはなにより大事な実地調査中だというのに。使える時間も限られている。守門は自らを叱咤し、答えた。

「おそらくは、室町中期から後期にかけて、じゃないかな。巻堀の建立からそれほど時代は空いていないはずだから」

守門は哉子を振り返り、あらためて問うた。

「君が山際教授から出発前に聞いた説明というのは、どんな？」

「東北地方、特に盛岡を中心とした生殖器信仰の背景と分布が主な調査対象だと。正直、教授の専門外というか、趣味的な いえ、個人的に興味を感じて調べていらっしやるのだと思っていました。私もあまり深くは訊こうとしなかったんです」

哉子にしてみれば、それは学術調査というより、週末を利用した遊興のようなものだった。守門と二人で旅行ができる、それだけで事前の情報は十分だったとも言える。そんな彼女の気持ちを知らずか、守門は言った。

「教授にしても、君に説明をしづらかったのは、事件の中心にあるのが生殖器信仰であるためもあるが、どうも全体がオカルトめいているだらう。葛原氏や斎王宮司からさつき聞いた通り」

「……確かに、話を先に伺っていたとしても、信じられなかったと思います。正直、いまでも把握しきれないと言つか……。信じられな

守門は肯いた。哉子はさらに続ける。

「それに、祠に籠る前の美春さんの奇矯きぎょうな行動のことですけど、私にはさっぱりわけがわかりません。駅で一日佇たたずんでいたとか、煙突を見つめていたとかいうのはどういう……それに給水塔によじ登ろうとしたなんて。あんな淑やかそうな人が」

「煙突と給水塔の方はわからないでもないが……駅というのが引つかかるな」

あごに手を当てて思索する守門。

「え？ 先生は理由がおわかりなんですか」

驚いて自分を見つめる哉子に、守門は言った。

「まあ、いまのところ仮説に過ぎないがね。美春さんは、金精神信仰の分布について調べるうち、巻堀と縁の深いこの久利緒神社に興味を抱き、見学にやってきた。奇行に走るようになったのはそれからだ」

そこまでなら整理がついている。哉子は肯いた。

「金精神というのは『耳囊』にもある通り、男性器を模った神様であることが多い。さつき見せてもらった御神体もそうだな。君はラカンか、フロイトを読んだことは？」

「フロイト……ですか？ 一般教養でかじった程度ですが」

哉子は面喰らったように答える。

「いま起きている現象と、古典的な精神分析論を単純に結びつけるのは安易に過ぎるかもしれないが……おそらく彼女 美春さんは、生殖器ファルスのメタファとしての煙突に惹かれたのだろうと思う。給水塔によじ登ろうとしたのも同じ理由じゃないかな」

論理ロジックとしては筋が通っていた。だが哉子にはあまりにも解せなかった。

「ええ？ そんな……いくら興味を抱いていたからって、普通そこまでするでしょうか。だって、明らかに常軌を逸してますよ」

守門は真面目な顔で肯いた。

「そうだ。確かに常軌を逸している。だからこそ私は知りたいんだ、

ここで彼女になにがあつたのか。彼女にそこまでの奇怪な行動を取らせているのは一体なんなのか」

美春の不可解な変貌が始まったのは、久利緒神社である種の特異な体験をしたせいではないのか。守門はそう踏んでいた。

「それに、あの宮司の態度も妙だ。いくら地元の名士の娘とはいえ、十日も籠城して出てこない人間をそのまま抱えておくなんて……」

守門は再び、境内の裏手へと歩き始めた。奥宮　と呼ばれている小堂の前で足を止める。

「見れば見るほど妙だな。これはそもそもなんのために建てられたんだ？」

祠と言つには大きい。拝殿の類にしては小さすぎる。どうにも半端な大きさだ。

「せめて中が見られればいいんだが」

「中、ですか？　宮司さんは、何体かの金精様が祀られているほかには特になにもない」と

「それが本当かどうかを確かめたいのさ」

守門は朽ちかけた木製の取っ手をかけた。わかつていたことだが、びくとも動かない。扉に顔を近づけてみても、宮司の言葉通り隙間や裂け目は皆無だ。

「やはり、だめか。別の方向から探っていくしかないな」

守門はあきらめて祠から離れた。哉子は、そのあとを追おうとして、ふと同じように扉に近づいた。そつと顔を寄せてみる。なにかが見えることを期待したわけではなく、あくまで師の真似をしたに過ぎなかった。

だが、結果は違った。

一瞬だけ、はっきりと中の様子が見えた。

金色のような、桃色のような霞がかつた空間の中、稚氣あふれる表情の美しい女が裸で横たわっている。円い繭のような茶色の褥ねどしの上で。女は笑っていた。そして、ゆっくりとこちらを見た。

女の、空洞のような真つ黒な目が哉子をとらえた。

次の瞬間には、その映像は消えていた。哉子は呆然と立ち尽くし、頭を乱暴に振った。もう一度目を凝らしたがなにも見えない。ただの木目の粗い観音扉がそこにはあるだけだ。

哉子は震える手で取っ手に触れた。

「小宮山君？　どうかしたのか」

本殿の方から守門の自分を呼ぶ声が聞こえる。哉子は反射的に手を引っ込めた。

「いえ　なんでもありません」

それから、今度こそ守門を追って駆け出した。祠を振り返ることはできなかった。

扉は開いたかもしれない、自分があのまま引っぱ張っていれば。その考えを、彼女は必死で振り払った。



## 第五章 哉子の痴態

『だからなんとも言ってるだろう、それも事件解決のための一助になるかもしれないと。でなくとも、現地調査の一環だよ君。そんなことを躊躇してどうするね』

「しかしですね、なにも温泉宿に泊まることは……。教授が宿泊手配は小宮山君に任せたとおっしゃるから、私はそのつもりでいたというのに」

『そのとおりだよ、彼女がわざわざ検討して押さえてくれたんだろう？ それでいいじゃないか。ああ、ちょっと立て込んでるんで、これで切らせてもらうよ。なにかあつたらまた連絡するから』

「ちょ、教授！ 待ってください、山際教授」

守門は携帯電話に向かって慌てて怒鳴った。が、空しく返ってくる不通音にがつくりと肩を落とし、あきらめて携帯を折りたたむと胸ポケットに仕舞った。

「どうでした？ 山際教授、今回のことについてなにかおっしゃってました？」

近づいてきた哉子が訊いた。その顔には満面の笑みが浮かんでいる。守門は沈鬱に口を開いた。

「……特になにも。それより、私は市街に出てビジネスホテルでも取ることにするから、明日の朝また駅前で合流しよう。それでいいね」

哉子の顔色が というより形相が変わった。

「そんな、だめです！ 私の手違いのために先生だけが出て行かれるなんて。それにいまは観光シーズンですもの、そんな簡単に宿が見つかるとは思えませんわ。同室ということまで心配されているのなら、私は気にしないと云ったじゃありませんか」

「いや、しかし、君ね……」

「部屋は二間続きだというし、襖で遮ってしまえば問題ありません。先生は紳士的な方だとわかっていますし、私なら大丈夫です。ですから、早くチェックインしてしましましょう。こんなところで揉めていたら旅館の方にもご迷惑ですわ」

「……」

守門は盛大なため息をついた。いまさらながら、悪魔のような恩師・山際を信用したことが悔やまれて仕方ない。

初日の調査を一通り終え、とりあえず宿入りすることにした二人だったが、雲行きが怪しくなったのはそこからだった。宿泊先は手配済みだという哉子の言葉を信じてタクシーに乗ったはいいが、着いたところは大宮温泉郷。地元の鄙びた温泉街だったのである。哉子はタクシーから守門を引きずり下ろすようにしてこの若九貴旅館の玄関をくぐり、フロントで予約客である旨を告げた。すると、思いがけない言葉が返ってきたのだ。

「小宮山様……はい、お連れの方とお二人様で、ご同室でよろしかったですね」

「なに？」

守門は仰天した。温泉旅館というだけでも合点がいかないのに、女性である哉子と同室など、とうてい受け入れられることではない。彼は動転しつつも継るようにフロント係に噛みついた。

「ちよつと待ってくれ。ほかに部屋は空いてないのか？」

フロントの若い女性は困惑顔で答えた。

「申し訳ございませんが、本日はご予約のお客様で満室となっております。お部屋の方は二間の造りになっておりますし、広めの間取りですので、お二人様でもご不便はないかと……」

そういう問題じゃないだろう、と守門が怒鳴りかけた時に携帯が鳴り、出てみると山際教授からで、この窮状を訴えかけても馬耳東風。それどころかこんなことを言い出したのだ。

『大宮温泉は地元じゃ金精神を祀る温泉地として知られていてね。実は元々、伝承蒐集も兼ねて私が行きたいと思っていたところなん

だよ。ほら、今回の事件と核心がかぶるかもしれないだろう？ 君も学者なら、つまらない常識なんかよりも一学究徒としての研究心を優先させたまえ」

「冗談じゃありませんよ教授。それとこれとは話が別です、小宮山君は女性なんですよ。それもまだ独身の……彼女の経歴に汚点を付けるような真似は、私は師としても先輩としても決して」

『汚点？ なにを言うんだね。君らが二人で同じ部屋に泊まったことなど東京の誰の耳に入ったりするものか。まったく、前から思っていたんだが、君はどうも腰が据わっていないというか、研究者としての覚悟が足りんよ。好い機会だ、度胸試しにそこで一泊したまえ。これは私の命令だ、わかったね』

その後も守門は反論を試みたが、無駄な抵抗に終わった。たださえ女性が苦手な自分が、その女性の中でももっとも苦手な相手と一晩同室で過ごす それはまさに苦行以外のなにものでもない。彼はうな垂れ、ロビーに置かれた椅子に力なく座り込んだ。しかし、もはや選択肢はない。守門はようやく腹を決めて立ち上がった。

ロビーに通じる廊下を歩いてくる女性たちの会話が耳に飛び込んできたのはその時だった。

「……不思議な話ですね。都市伝説ってやつですか？」

「ええ、それもここ最近の。お客様もお若くていらっしゃるから、ひよっとしたら呼ばれちゃうかもしれないよ。……あ、そちらが大浴場になりますので」

「ありがとうございます、それじゃ」

守門は反射的に顔を上げた。と同時に叫んでいた。

「あ 阿夜！」

まだ少女のような仲居の娘に笑顔を向けていた若い女性客、つまり阿夜は、弾かれたように振り向いた。その顔が遠目にも硬く強張っている。

「……お兄ちゃん……なんで？ なんでこんなところで会つのか？」

阿夜はやつとのことでそれだけ搾り出した。胸の内で、今度の旅

行は呪われているのだろうかとぼんやり自問した。一方、守門はなぜかほっとしたような表情すら浮かべて阿夜の元へ駆け寄った。そして咳払いをひとつしてからこう切り出した。

「阿夜、君がここにいるということは、西行君も一緒なんだろうな」

「……まあね」

「じゃあ 私に提案がある。彼を呼んできてくれないか」  
守門はにっこりと微笑んだ。

盛岡市の中心部から車で走ること三十分。ここ大宮温泉は開湯八百年、肌をなめらかに整えるという効能で知られる重曹泉の温泉郷である。ほんのりと薄く濁りを帯びた出湯いづゆは美人の湯としても名高く、温泉通には隠れた名湯として知る人ぞ知る存在だ。

「美人の湯というからには、たっぷり浸かっていかなきゃ。ね、阿夜さん」

哉子は檜の浴槽にゆつくりと身体を沈めながら言った。阿夜は脱衣所でのろのろと服を脱ぎ、浴室へと入った。

「え、ええ。それより哉子さん、なんでおとなしく従っちゃったんですか、あんなめちゃくちゃな提案に」

木の柄杓ひしゃくでまんべんなく湯を浴びてから浴槽に足を入れ、なるべく波を立てないようにそつと沈み込む。大浴場と違い、貸切専用の浴場はそれほど広くなく、それは浴槽も同様と言えた。哉子は困ったように笑ってみせた。

「でも、私たちの方も助かったのよ、阿夜さんたちのおかげで。あのままじゃ先生、ほんとに一人でビジネスホテルを捜しに行きかねない剣幕だったし……それじゃ私も申し訳ないしね」

「それにしたって……もう、ほんっとお兄ちゃんて石頭なんだから！」

阿夜はため息をついた。守門は、阿夜と黎もこの同じ若九貴旅館

に一室を取っていることを知り、部屋割りの変更をかなり強引に申し出たのである。つまり、男性陣である守門と黎、そして女性陣の阿夜と哉子、という具合にメンバーを入れ替えてそれぞれ一組に一部屋をあてがえば、当初の主に守門の側の問題が解消できる、というわけだ。もちろん阿夜は猛反対したが、意外にも黎は特に反論も示さず、それに哉子もなにも言わずその提案を呑んでしまったため、いま、阿夜は黎と入るはずだった貸切風呂になぜか哉子と一緒に浸かっているのだった。

「大体あたし、まだ今朝のこと赦してもいないっていうのに。なんでお兄ちゃんの方が態度強いわけ？ほんとわけわかんない」

哉子はくすりと笑った。

「先生、心底阿夜さんが心配でしょうがないのよ。あんなに取り乱した姿、私初めて見たもの。……でもそれが、逆にすごく新鮮だったけれど」

阿夜はちらりと哉子を見た。声色が、心なしに色っぽく変化したように聞こえたからだ。

「それを言うなら、あたしだってお兄ちゃんのこととは心配だな。いつまで経っても彼女作ろうとしないし。大人になっても相変わらず女ぎらいなんだから」

阿夜の発言は哉子の興味を大いに惹いたらしい。

「女ぎらい？先生ってやっぱり女性が苦手なの？昔から？」

阿夜は力強く肯く。

「そう、昔っから。あたしが知ってるだけでも、たとえばバレンタインとか、お兄ちゃん相当いっぱいチョコとかもらってたくせに、そういうの全部あたしにくれてたんですよ。甘いものがきらいなせいもあるけど、なんか根本的に苦手意識があるみたいで」

「そう……不思議ね。あんなに素敵な方なのに」

哉子は浴室の天井を見つめながらつぶやいた。阿夜は異議を唱えようとして、ふと、洗い場の横に置かれた金のオブジェに目を遣った。先端が丸く胴体が細長い、全体としては涙型の奇妙な物体であ

る。

「ね、哉子さん。あれなんですかね？　あの金色の……」

哉子は意味深な笑みを浮かべた。

「ああ、あれは、要するに男性器ね。ほら形が似ているでしょ」

「は？」

阿夜は口を開けて哉子を見た。冗談かと思つたのだ。

「やだ阿夜さん、別にめずらしいことじゃないわよ。元々温泉つていうのは女陰、つまり女性器の象徴でもあるの。地から湧き出るつていうのが、あまつかみ天津神による建国以後に主流となつた父性信仰以前の母性信仰　地祇とか地母神信仰と結びつくのかもしれないわね。

だから、その温泉が枯れないように、女陰に対応するところの男性器を祀っているというわけ。祀られているものを神様として『金精様』なんて呼んだりもするわ」

「はあ……」

哉子の説明は半分も理解できなかったが、阿夜はなんとなく湯船を出、その金色のオブジェに手を翳し、そつと触れてみた。

「そう、そうやって触るのがいちばん正しい接し方よ。そうすることと婦人病が癒されたり、子どもを授かったりつていうご利益があるの。聞いたことあるでしょ、そういう話」

「ああ、確かに……ていうかこれ外れるんだ。おもしろーい、こつやって上に載せてあるだけなんですわ」

オブジェは丸い四つの足の上に置いてあるだけなので、簡単に持ち上げることができた。阿夜は試みにそれを抱き、ぬいぐるみにでもするようによしよしと撫でた。その様子に哉子が噴き出す。

「そうそう。ね、撫でてるとちよつと本物っぽいでしょ」

哉子の思わぬ過激な発言に阿夜も悪乗りする。

「いや、ていうか、本物つてこんな大きくないですよね」

二人は声を上げて笑った。浴室での物音は思った以上に反響する。二人の笑い声は、壁を隔て、隣に設けられているもうひとつの貸切風呂にも伝わってきた。

「まったく、女性が三人集まると姦しいとはいうが、あれなら二人でも充分文字として成り立ちそうだな」

守門は手のひらで湯をすくい上げ、顔を濡らしながら呆れ気味に　その実、阿夜と哉子が思いがけず仲良くやっているらしい様子に、ほっと胸を撫で下ろしていたのだが　つぶやいた。それから改まった口調で連れの青年を見、声をかけた。

「申し訳なかったな、西行君。こんな無理な提案を聞いてもらって……しかし正直助かったよ。真剣に野宿しようかと思っていたところだったんだ」

隣で湯を遣う黎は微笑した。

「いえ、気にしないでください。ぼくの方もいちど、先生と二人きりでゆつくり話がしたいと思っていましたから」

「え？」

「以前にも言ったかもしれませんが、ぼくは先生に、個人的にすごく興味があるんです。そういう意味で、今日は好い機会ですよ」

黎は謎めいた笑みを見せた。守門はその言葉の真意を測りかね、狭い浴槽のできるだけ端っこへと身体を寄せた。黎の口元から低い笑い声が漏れる。

「そんなに警戒しなくても大丈夫ですよ。ただ……先生、あなたには、ぼくのようなある種の人間をやみくもに惹きつける不思議な魅力があるんです。まるで強力な磁石みたいだね」

守門は顔をしかめた。黎のせりふにはどこか不吉な響きがあったからだ。当の黎は、守門の反応には頓着することなく、こう話を続けた。

「それよりも、先生。今回のフィールドワークは、ただの学術調査ってわけじゃなさそうですね。なにが起きているのか、教えてもらえませんか」

黎の口調が変わっている。守門は戸惑って彼を見た。  
「わかるのか」

黎は首を横に振った。

「わからないから訊ねていゝんです。いつもと様子が違ふ……でなければ、ここであなたや哉子さんと鉢合せすることだつて靈視<sup>み</sup>えていたはずですが。昼間は 新幹線の中ではこうじゃなかったんです。それが、だんだん……泥水が混ざり込むみたいに、視界が濁つてきて……こんなことはいままでにはなかった」

黎はいつになく難しい顔で守門を見つめた。守門は再び湯をすくい、顔を乱暴にこすると言つた。

「そうだな……君の助けが必要になるかもしれない。とにかく奇妙な事件なんだ」

黎は身動きせず答えた。「ええ」

だが守門が事情を説明しようと口を開いた時だ。隣の貸切風呂から派手な水音が響き渡つた。続いて阿夜の動転したような声。なにかを争うような物音 守門と黎は顔を見合わせた。

「一体どうしたんだ阿夜たちは……隣でなにか起きてる？」

「ええ。もしかしたら哉子さんの身になにか……」

言ひも終わらぬうちに、二人は同時に湯船を出た。ほとんど濡れたままの身体に急いで浴衣を羽織り、脱衣所を飛び出すと隣の浴室の引き戸を叩いた。

「どうした、阿夜！ 大丈夫か！？」

守門の声に気づいたららしい阿夜が中からおろおろと応答した。

「お兄ちゃん？ どうしよう、お兄ちゃん、哉子さんが……哉子さん、だめ、やめてつてば！」

「阿夜！ ここを開けなさい、いま行くから！」

ほんの少しの間があり、鍵を開ける音がした。守門と黎は引き戸を荒々しく押しのけ、中へ踏み込んだ。浴衣姿の阿夜が、泣きそうな顔で守門に訴える。

「お兄ちゃん、哉子さんがおかしいの。……だめ、哉子さん、それを離して！」

浴場を振り向いた阿夜はすかさず駆け出した。それにつられて哉子を見た守門は我が目を疑つた。



「小宮山君　君は一体なにを……なにをしてるんだ」

哉子の返事はなかった。

哉子は、浴場の真ん中で、脚をほぼ百八十度を開き、踊るように上体を揺り動かしながら笑っていた。右腕を高く振り上げ、さらに四方八方へ振り回している。よく見ると、その手には、見慣れぬ金色の物体が　この大宮温泉の象徴でもある金精神のオブジェがしっかりと握られていた。あまりの事態に守門は混乱して立ち尽くした。その脇をすり抜けるようにして黎が哉子へ駆け寄る。

「哉子さん、落ち着いて。それを離すんだ。……先生！　手を貸してください、いま哉子さんは明らかにかに自我を奪われてる。ぼくだけじゃ手に負えない」

黎の鋭い声に守門ははつと我に返り、脱衣所に置かれたバスタオルを手に彼女の元へ向かった。男二人がかりでも容易に押さえつけられないほど、彼女の力は凄まじかった。守門は怒鳴った。

「小宮山君！　どうしたんだ、一体……頼むから落ち着いてくれ！」  
すると、哉子の強張っていた肢体から一気に力が抜けた。彼女はぐつたりと守門の腕の中に崩折れた。意識を失っているのか、呼びかけてもまったく反応がない。

「哉子さん……大丈夫？　お兄ちゃん、一体なにがどうなっちゃったの」

守門は硬い表情で首を振った。

「わからん。とにかく、部屋へ運ぼう。阿夜、彼女に浴衣を着せてやってくれ」

「あ……うん」

阿夜は哉子の身体を拭き、黎が脱衣所から持ってきてくれた浴衣をとりあえず着せた。守門は彼女を両腕で抱き上げ、修羅場と化した浴場を出た。貸切風呂をあとにしたところで、タイミングよく一人の仲居がやってくるのが見えた。彼女はびっくりして口を押さえた。

「まあ！　どうされました、お具合でも」

守門は短く肯いてみせた。

「どうも湯中<sup>ゆあた</sup>りしたらしくて……申し訳ないが、部屋に水枕かなにか持ってきてもらえませんか」

「ええ、はい、わかりました。すぐにお持ちいたします」

仲居はあたふたと奥の部屋へ引ッ込んだ。三人はそのまま二階の客室へ向かい、布団を敷くと哉子の身体をそつと横たえた。守門は大きく息をついた。

「あの様子は、まるでトランス状態<sup>シャーマン</sup>の巫女だな。阿夜、一体なにがあつたんだ」

阿夜は自信なげに口を開いた。彼女自身、事態を把握し切れていないのだ。

「わかんない。普通に話してたのに、突然……目つきがおかしくなつて……それから湯船を出て……」

黎が静かに訊ねた。

「阿夜。ああなる前、哉子さんとなんの話をしていた？」

「え？ なんのつて……それは、その……」

阿夜は心なしか頬を赤らめ、どこか言いにくそうにぼつぽつと話し始めた。

## 第六章 都市伝説考

阿夜は一通り笑った後、哉子にもそのオブジェ、金精様の神像を渡した。

「ほら、絶対、実物より大きすぎ！ しかも光ってるし。超うける！」

哉子も笑いながら神像を受け取った。顔のそばまで寄せ、まじまじとそれを見つめる。

「哉子さん、見すぎですって」

阿夜はまたも噴き出した。しかし哉子の表情は思いがけず真面目なものに変わっていた。

「厭ね、学術的観点からの興味よ。でも……不思議よね。現代でもこういうものに、神性を見出して祀る慣わしがあるなんて。生殖っていうのはやっぱりそれ自体が、祭祀的な行為なのかもしれないわね」

哉子は己に向かって語るようにつぶやいた。阿夜は眉根を寄せて彼女を見た。

「祭祀的な行為？ Hするってことが？」

「ええ。たとえば長野のある地域では、祭りの時に性交的な舞踊が奉納されるという慣習があるし、東北は馬の産地で有名だけど、その馬の出産の際には、男根を模った神像かたどを持って社前で踊れば安産になるって謂れがあるわ。生殖と信仰は、切っても切れない関係にあるのよ」

「そうなのかなあ……でも、そう考えると神様ってやらしくないですか？」

「え？ どうして？」

「だって、じゃあ神様に祈る時はHするのがいちばんってことになるじゃないですか。それを神様は喜んで見てるわけでしょ？ なん

かすごくエロい気がする」

哉子はじつと阿夜を見つめた。

「……そうだとしたら、私はわかる気がするわ。神様の気持ちが」  
阿夜は戸惑った。哉子の目がどこか据わっている。

「か、神様の気持ち……ですか？ それって……」

「だって……あなたみたいに可愛い女の子がセックスしてるところ  
って興味あるじゃない？ いえ、神様じゃなくたって興味を抱くのが  
当たり前じゃない……？」

阿夜は咄嗟に身を引いた。と言っても、狭い湯船では後退るほどの  
スペースもなく、浴槽の隅に背中を押し付けるのが精一杯だった  
が。

「か、哉子さん、あの……」

哉子は阿夜の身体に手を伸ばし、撫でるように湯の中で弄った。

太ももから腹へ、そして胸へと蛇の舌のようなその手が動く。阿夜  
は完全に固まり、抵抗することすらできない。

「や……ちょ、ちょっと……か、哉子さ……」

「あなた可愛いわ、阿夜さん……私なんだか変な気分になってきち  
やった……」

哉子は嫣然とつぶやき、身動きできないでいる阿夜の唇に自らの  
唇を触れさせた。そのまま頬、首筋、耳元へと愛撫を続ける。阿夜  
は必死に首を振って逃れようとしたが、いつの間にか背中に回され  
た哉子の腕は縄のように固く、逃れることができない。

「やめ……やめてください、哉子さん……」

哉子の指先が阿夜の乳首をとらえ、軽くいたぶった。弱いところ  
を責められ、阿夜の口元から軽い喘ぎが漏れる。

「……んっ……だ、だめ……っ」

「ほんと可愛い……だからきつと先生も夢中になるのね……あなた  
がいる限り、先生は他の誰のことも見てくれないんだわ」

哉子の爪先に力が籠った。痛みに阿夜は小さく悲鳴を上げた。哉  
子は阿夜を突き飛ばすようにして離れ、いきなり立ち上がると浴槽

から出た。わけがわからずも安堵する阿夜だったが、その安心は少し早すぎた。

哉子の手には金精神の神像が握られていた。そして洗い場に座り込み、大きく開脚すると、あろうことかその神像を局部に向けて挿入しようと試み始めたのである。

「んっ……大きすぎてうまく入らない……阿夜さん、ぼんやり見えないで手伝ってちょうだい」

阿夜は呆然と彼女を見つめた。そして我に返り、慌てて湯船を飛び出すと、彼女から神像を取り上げようと遮二無二手を伸ばした。

「哉子さん、なにやってるんですか！？ 宿の備品でそんなことしたら下手したら犯罪……じゃない、それきれいかどうかわかんないし……じゃなくて、やめてください！ 離してくださいったら！」

哉子は突如けたたましく笑い出した。しかし目はまったく笑っていない。阿夜の全身に鳥肌が立った。これは……やばい。直感が彼女にそう告げた。無我夢中でもみ合う中、柄杓や桶が辺りかまわずひっくり返る。パニックで涙が出そうになった時、脱衣所の外から助けの声が聞こえた。阿夜は身を翻して浴場を飛び出した。

それはあまりに異様な経緯だった。守門は絶句して阿夜を見た。

阿夜は決まり悪そうに視線を外して黙り込んでいる。

「阿夜……本当なのか、その話は」

阿夜は守門を素早く睨んだ。

「こんな嘘ついてどうするのよ。ていうか作れないわよ、こんな……わけわかんない話」

阿夜の言葉はもつともだ。しかし守門にはにわかには信じられることではなかった。

「この、小宮山君が……君に迫った挙句、そんなことを……」

なにしろ学内一の才媛として名高い哉子である。美貌と才知を兼

備し、他人よりもはるかに高い矜持を併せ持つこの女性が、そんな醜態　と一言で片付けるには無理があるが　を晒すとは。

阿夜は声を潜めて守門に訊ねた。

「哉子さんて、もしかして……バイ？」

守門は訝しげに眉根を寄せた。代わりに答えたのは黎だ。

「両性愛者のことですよ。でも、それはない。彼女が好きなのは先生、あなたただだ。だからこそ彼女は取り憑かれたんです」

守門と阿夜は同時に黎を見た。

「取り憑かれたって……一体なにに？」

「それはわかりません。でも彼女がなにかに意識をのつとられていたのは確かだ。おそらく、彼女の精神状態が、そのなにかにとってもっともつけ入りやすかったということもあるでしょう。しかしそれだけじゃない。契機があつたはずです」

黎は真つ直ぐに守門を見返した。守門は再び訊ねた。

「契機、とは？」

それには直接答えず、黎は続ける。

「先生。教えてください。今回のフィールドワークの目的はなんなんですか？　なにが関わっているんです」

黎は睨むようにじつと守門を見つめている。その時、客室のブザーが鳴り、先ほどの仲居の声が聞こえてきた。

「すみません。水枕、お持ちしましたけど」

阿夜が腰を上げ、ドアを開けた。大きめの盥たらいの中に、アイスノン、おしぼり、タオル、氷嚢が入れられ、他に何種類かの薬が箱ごと入っている。阿夜は礼を告げた。

「お手数かけてすいません。ありがとうございます、お借りします」仲居は室内を覗き込むようにして言った。

「いいいえ、それよりお連れの方大丈夫です？　てつきり魂だけ呼ばれちゃったかと思いましたよ」

「魂だけ呼ばれた？　それはなんのことです？」

いつの間にか背後に来ていた守門が耳聴く訊ねた。その詰問する

ような口調に、仲居は慌てて口を閉じ、愛想笑いを浮かべた。

「いえ、なんでも。ただの噂ですから」

「かまいません、ぜひ話してください」

その真剣な様子に、仲居は怪訝な顔で逆に訊ねる。

「お客様……記者さんかなんか？ 東京からお出ででしたよね」

「あ、ええ。大学で歴史調査をしている者です。各地の民話や伝承の蒐集も仕事のうちですから」

そう言つてにっこりと微笑む。この笑顔に弱らない女性はまずいない。思つたとおり、この中年の仲居はたちまち相好を崩した。

「まあ、それじゃ学者さんですか？ お若いのに大したもんですね。……いえね、実はここんとこ、夜になると若い女の子が家を抜け出して、朝になると帰つてくるってことがやたらあちこちで起きてるんですよ」

「若い女の子が？」

仲居は大きく肯く。

「ええ。でもね、別に事件に巻き込まれるとかそういう話じゃないんですよ。ただふらふら家を抜け出して、朝方ひよつと帰ってくるらしいんです。実は私の知り合いにも娘さんがそういう状態になつたって人がいてね、聞いたらやつぱり十五だか十六で、夜中に玄關の鍵が開いてるのに気づいたんで方々捜したけど見つからない。朝なつて警察に届けようかって頃に戻ってきたんですって。それがね、どこへ行つていたのか聞いても本人には記憶がないっていうんですよ」

「ほう……」

守門の脳裏を、昼間葛原武人から聞いた、美春の奇行の件が過ぎつた。

「親御さんは途方に暮れちゃってね。ただどこも怪我してるわけじゃないし、まあ衣服の乱れもないもんだから、様子を見ようつてことにして。結局それは一度つきりだったみたいですけどね……それがそのお宅だけじゃなくて、若いお嬢さんのいるあちこちの家で

聞かれるようになったんですよ」

守門は思案げにあごを撫でた。仲居はさらに続ける。

「いくら実害がないったって、それだけ続けば騒ぎになるでしょう。で、いろんな番組で取り上げられたりしてね。でも原因はいまわからずじまいで。年頃の娘さんのいるお宅じゃ戦々恐々としてるんじゃないですかね。なにしろ夢遊病みたいな状態で夜中にふらついてるとしたら、いつ犯罪に巻き込まれたっておかしいですからね」

「確かに。それで小宮山君 連れの様子を見て、魂だけ呼ばれたと……身体はあるのに意識だけが家を出て行った、という意味でおっしゃったんですね」

仲居は決まり悪げに肯いた。

「ええ、まあ。でも湯中りされたってことですから、少し休まれれば大丈夫ですよ。じゃあ、私はこれで。申し訳ありませんね、長居してしまつて」

「とんでもない。大変参考になりました。ありがとうございます」

守門は丁寧な礼を述べた。仲居は頬を染めつつも、そそくさと部屋をあとにした。

二人はドアを閉め、室内に戻った。盥から取り出したアイスノンにタオルを巻き、哉子の頭の下に差し入れる。それから冷たいおしぼりを広げて哉子の額に乗せ、その脇で氷嚢をセットする。その作業が終わると、阿夜は言った。

「あたし、さっきの話、ここに着いた時に別の仲居さんから聞いた。昼間もお土産物屋さんの近くで高校生の女の子たちが話してるの聞いたけど、それだとおまけがあつたんだ」

「おまけ？」

阿夜は肯いた。

「うん。その、一晚家出しちゃう女の子って処女なんだって。で、戻ってくると処女喪失しちゃってるって。ただそれは、あくまで噂みたい。ほんとにそうかどうかはわかんないって」



「……処女だけが呼ばれて、戻ると処女を喪失してる……？　それは　まるで『東山誌』<sup>とうざんし</sup>の一節だな。いや、あれは、あくまで初潮の暗喩としての迷信ということになっているが……」  
反骨精神あふれる明治時代のジャーナリスト、宮武外骨<sup>みやたけがいこう</sup>が風俗史として紐解いた『東山誌』の中に、巻堀界限に住む少女たちは、十三、四になると一晩中金勢明神に淫流されるというショッキングなくだりがある。金勢明神とはすなわち男根を指すのだから、これは一般的には初潮を迎えた少女に特有な心理状態を表す逸話だと解釈されている。

「特有な心理状態って？　Hしたい、ってこと？」

守門は居心地悪そうな顔で咳払いをした。

「まあ、その方面に興味を持つようになる年頃ってことかな。実際にそういうことがあったわけではむろんないだろうから、迷信というか、そういった類の伝承に過ぎないと思うが」

「ふうん……あたしむしろ、グリム童話を思い出したな。そっくりの話あるじゃん」

「え？　グリム童話？」

阿夜は座布団を手繰り寄せると、その上に座って片ひざを立て、両手を回してそのひざを引き寄せた。

「そう。『おどる十二人のおひめさま』って話」

「ああ、『踊ってこわれた靴』か。確かに、いまの状況にはこちらの方がより近いかもしれないな」

「あの話もやつぱ初潮？　それとも処女喪失？」

守門は苦い顔をした。

「そういう単語をそう気軽に連発するんじゃない。……まあ、伝承の解釈はともかく、昼間の調査が小宮山君の精神状態に悪影響を及ぼしたということだけは間違いないだろう。明日の朝、すぐに彼女を東京に送り届けることにするよ。私はそのあとで、あらためて調査を再開する」

黎が意味深な口調で言った。

「そう簡単な話ではないかもしれませんが。先生、その調査について詳しく話してください。どうも厭な予感がするんです」

阿夜は不安げに黎の横顔を見上げた。「黎……？ 厭な予感って

……」

「わからないけど……まだ霊視<sup>みえ</sup>できないんだ。なにも」

黎は哀しげに彼の恋人を見た。

## 第七章 金精神

むかし、ある国の王さまには十二人のお姫さまがいました。

十二人のお姫さまはなかよしで、いつも同じ部屋で眠り、そして部屋のドアには、王さまが頑丈な鍵をかけます。

実は、十二人のお姫さまには、ある不思議な秘密があったのです……。

阿夜はゆっくりと目を開けた。見知らぬ天井が暗闇の中にぼんやりと浮かび上がる。ああ、旅行に来ていたんだった。それも慰安になるどころか、散々な内容の……彼女は布団の上に起き上がった。枕元に置いたショルダーバッグから手探りで携帯を取り出したが、明るく点灯するはずの画面は開いても真っ暗のままだ。

「そっか……充電切れしてたんだっけ」

充電器を持ってきてはいたが、昨夜、コンセントにつないでおくのをすっかり忘れていた。欠伸をしながら布団を這い出す。いま、何時なのだろう？ 電気を点けたら隣で寝ている哉子を起こしてしまうかもしれない。阿夜は床の間に小さなルームランプが置かれていることを思い出し、そこへにじり寄ると、そつと紐を引っ張った。置時計のディスプレイを見ると、午前三時 丑三つ時、という時刻だ。奇妙な夢を見たせいで半端な時間に目が覚めてしまった。十二人のお姫様が、いまも地下へ続く階段を降りて、地底の楽園へ出かけようとしているところだった。

『おどる十二人のおひめさま』あるいは『踊ってこわれた靴』は、グリム童話の中でも特に官能的かつ享樂的な雰囲気彩られた異世界譚である。その不道德とも言える独特の空気は、子どもだった阿夜をさえ魅了してやまなかった。

楽園って天国みたいな場所でしょ？ どうしてそれが地面の下にあるの？　なんか、行っちゃいけない場所みたいで変だよ。

幼い頃、阿夜は守門にこの絵本の読み聞かせを繰り返しせがんで、はそう訊いたものだ。楽園であるはずの異界がなぜ冥府のイメージがつきまとう地底にあるのか、阿夜にはずっと不思議だったのだ。

守門は当時、なんと答えていただろう？　そんなことを思いつつ冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出すと一口含む。そして、ふと隣の布団に目を遣った阿夜の動きが止まった。

「か……哉子さん……」

阿夜はペットボトルを放り出すとトイレへ向かった。そこは無人だった。慌てて褌ふんどし袍を引つ掛けると客室のドアを開けた。案の定、寝る前に閉めたはずの鍵は解かれていた。阿夜は守門たちが泊まっている部屋へとダッシュした。

「お兄ちゃん……お兄ちゃん、黎！　起きて、ねえ」

なるべく小声で呼ばわりながらドアを叩く。やがて室内から反応があり、ドアが素早く開けられた。顔を出したのは守門だ。ほとんど眠れなかったようで、目の下にはうつすらとくまが浮き出ている。「どうした、阿夜。なにかあったのか」

彼は緊張した面持ちで訊ねた。阿夜はあたふたと肯き、言った。

「どうしよう、起きたら哉子さんいなくなってるの。こっちには来てない？」

「なんだって？　いや、こちらにも来てはいない。……まずいな」

守門の顔が一気に強張る。その背後から黎が現れた。

「先生。彼女がいるとしたらあそこしかありません。すぐに出かけましょう」

「あそこって？　黎、もしかして霊視みえたの？」

黎は首を横に振った。「いや。でも、それしか考えられない」

「……あそこか。わかった、すぐタクシーを呼んでもらうから、二

人とも外出できるように着替えてくれ」

守門は短く応じると、フロントへ電話をかけるため受話器を取った。

タクシーが久利緒神社の前で止まると、三人は息せき切って車外へ出、鳥居をくぐった。灯りは皆無で、境内は文字どおり墨を流したような漆黒の闇に包まれている。その闇の中を、阿夜は黎につかまるようにしながら走り、守門の先導に従って、もつとも奥まって建てられた殿舎である祠へ向かった。意外なことに、そこには例の老いた宮司がいた。突然現れた守門たちの姿に驚きを隠せないようだ。

「あ……あなた方、なぜここに」

「それはこつちのせりふです。なぜあなたがよりによっていま、ここにいるんです」

守門は彼を睨みつけた。

「わ、私は……社地の見回りです、それでこちらに……この主殿に」「こんな夜中に？ それに……主殿と言いましたか？      やはり

あなたは、心当たりを隠していたんですね」

斎王宮司の顔が苦しげに歪んだ。守門は彼を押しつけるように祠の前へと進み出た。

祠の周辺には彼ら以外、人の気配はなかった。辺りを包むのは闇とともに、恐ろしいほどの静寂だ。守門は生唾を飲み込むと、観音扉に手をかけ、ゆっくりと引いた。果たして扉は開いた。そして目の前で展開されるこの世のものとも思えぬ光景に、誰もが言葉を失って立ち尽くした。

たたみ二畳分ほどしかないはずの空間はどこまでも広がり、黄金色と桃色を足したような明るく妖しげな光に満ちあふれて輝いている。その真ん中に、木造らしい丸い繭のような棺のようなものがゆ

らゆらと浮かんでいた。大きさはまったく違えど、守門は咄嗟に天あまの磐船いわふねを連想した。

「小宮山君……それに……」

守門は掠れ声でつぶやいた。棺の中に確かに哉子がいいた。全裸で微笑を浮かべ、背後の女性に抱きかかえられるようにしてもたれかかっている。彼女の後ろにいる、聖母のごときたおやかな表情の女は、まさしく写真で見た葛原美春に他ならなかった。二人はもつれ合い、互いを愛撫しながら笑い続ける。おぞましさに守門の背中を冷たい汗が滑り落ちた。

「お兄ちゃん……なんなの、これ……」

阿夜が怯えてつぶやくのが聞こえた。昨夜、守門から一渡り事情を聞いてはいたが、とてもことに理解が追いつかない。しかしそれは守門も同様だ。彼は乾いた声でこう返した。

「わからん。が、とにかく小宮山君と、彼女……美春さんをここから連れ出さなければ。……小宮山君！ 小宮山君、私だ、諸橋だ。こつちへ来るんだ、聞こえないのか、小宮山君！」

哉子はまったく反応を示さない。

「哉子さん、哉子さん！ お願い聞いて、こつちへ来て！ 哉子さんってば」

阿夜の呼びかけも空しく、哉子と美春は楽しげに絡まりあったまま、互いを離そうとしない。やがて哉子のさらなる異変に気づいた守門は瞠目し、彼らへと一步步み寄っていた。

「なんだあれは……小宮山君の足元が、茶色く……まるで木肌みたいな色目に……」

「お兄ちゃん、哉子さんの足、木みたいになっちゃってる……しかもそれ、どんどん上に広がってる！」

阿夜が悲鳴に似た声を上げた。彼女を支えながら囁く黎。

「あの木棺がこの神社の本当の祭神なんだ。哉子さんはおそらく昨日、あれの思念波のようなものを感じ取ってしまったのかもしれない。それが契機だったんだ。だから……」

「昨日の話の真相がこれか。やはりあれは事実だったようだな」

守門は眉を歪めて吐き棄てた。

「昨日の話って……」

「若い女性がなにものかに呼ばれて一晩行方不明になるって話さ。

小宮山君を呼んだのはそのなにかだ、その正体が、きっとあの木棺に宿るものだ」

だが、巷の噂では、呼ばれるには条件があつたはずだ。その素朴な疑問を、阿夜は思わず口にした。

「だだ、だって……哉子さんて、処女だったの？」

守門はやにわに赤面しつつ怒鳴った。

「そんなこと私が知るか！ とにかく、彼女があのとおりなにかに強く感応してしまっているのは事実だ。私たちの声も聞こえないくらいだからな」

その時だった。黎の反駁する声が静かに響いた。

「私たち、ではないですよ先生。先生の声なら彼女は聞くはずです」

思わぬ言葉に守門は戸惑って黎を見た。こんな状況だと言うのに、黎は微笑さえ浮かべている。

「いまの哉子さんに問いかけられるのはあなただけです、先生。彼女が聞きたいのはあなたの言葉だけなんですから」

「私の言葉って……しかし、現に彼女はさっき……」

「彼女が欲しがっている言葉を言わなければだめなんです。……おわかりでしょう」

黎はさらに続けた。

「先生。早くしないと、彼女は完全に美春さんに金精神に取り込まれてしまいますよ」

「……」

黎の言葉は真実だ。守門は苦渋の表情を浮かべた。哉子の肢体は、すでに腰のあたりまでが木棺と同化してしまっている。一刻の猶予も赦さない事態であるのは明白だった。守門は木棺へ 哉子へと

一歩近づいた。

「小宮山君……小宮山君、聞こえるか！ 頼む、返事してくれ！」  
黎は首を振った。あの呼びかけでは無意味だと言うのに……。

「小宮山君、私はその……君のことは良き後輩だと思っている。君は聡明だし、有能で、憧れている人間も多いはずだ。だから、その……頼むから戻ってきてくれ。君がいないと……私は困るんだ」

空を彷徨<sup>くう</sup>っていた哉子の瞳が一点に留まったように見えた。守門はさらに続けた。

「私は正直、女性に苦手だし、その……どうやって付き合ったらいいのかわからない。君にも多分不快な思いをいろいろさせてしまっていると思う。だが、それでも信じてくれ。君は優秀な助手だ。君がいてくれて助かることもたくさんある。私は未熟で、だから……」  
守門は哉子へと手を伸ばした。

「君が必要だ。小宮山君、戻ってきてくれ。頼む」

哉子のはつきりと守門を見た。その白く細い腕<sup>かいな</sup>が、彼女の師へこの世でもっとも愛する男へと差し出された。思わぬ反応に瞠<sup>も</sup>目し、指先に触れようとする守門。次の瞬間、阿夜が叫んだ。

「お兄ちゃん……危ない、離れて！」

哉子に宿った美春 いや、金精神が、守門をも取り込もうとするかのように彼の手を捕らえ、恐るべき力で自らの境界へと引き寄せた。守門の靴が、足が、見る間に哉子と同じように茶色く変質していく。阿夜は悲鳴を上げて立ちすくみ、守門に駆け寄ろうとし背後から黎に抱きとめられた。

「お兄ちゃん！ 離して黎、お兄ちゃんが！」

「落ち着いて阿夜。いま近づいたら君まで取り込まれてしまう」  
「だって、このままじゃお兄ちゃんが」

取り乱してわめく阿夜の髪が揺れ、その耳元のピアスが光った。

黎は言った。

「いちかばちかだ。阿夜、そのピアスを外して、哉子さんに向かって投げるんだ。早く！」



黎の言葉を受け、阿夜はわけがわからずも右耳のピアスを乱暴に外した。昼間、土産物屋で黎が買ってくれたアメジストだ。温泉では一応外していたが、入浴後につけ直しておいたのだった。阿夜はそれを哉子めがけて無我夢中で投げた。タイミングを合わせて黎が叫んだ。

「オン ヒツチリ カロラウンケンソバカ……ヒチチリ カラロヒ ウンケンソバカ！」

白い閃光が煌めき、阿夜と黎は凶暴な目映さに目を瞑った。

そして目を開けた時、守門と哉子が抱き合ったまま床に倒れているのが見えた。阿夜は黎の腕を振り払って二人に駆け寄った。

「お兄ちゃん……お兄ちゃん！ しっかりして！」

身体をゆすると、やがて反応があった。守門は低く呻きながらもどうにか自力で起き上がった。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

「う……ん、ああ、阿夜、無事か。……小宮山君は」

黎の声がそれに答える。

「大丈夫、気を失っているだけです。それより……」

「そうだ……美春さん……美春さんはどこへ行ったんだ」

守門は額を押さえながら辺りを見回した。さっきまではあれほどどこまでも広がって見えた空間は、粗末な祭壇の設えられたただの小堂に戻っていた。木棺と見えたものは祭壇の上に転がる小さな船形の木に過ぎず、美春の姿もどこにも見当たらない。

「ど……どういことだ？ 彼女は確かにさっきここに……」

「本体ではなかったようですね。ここにいたのはおそらく彼女の精神体の影……実体は別の場所にあるんですよ」

「別の場所？ それは……」

三人は同時に顔を見合わせた。そして祠から飛び出し、この異常な一部始終を目の当たりにして呆然と立ち尽くしたままの宮司に守門が怒鳴った。

「車を貸してくれ。美春さんは駅に……西口の高層ビルのどこかに

いるはずだ」

## 第八章 真夜中のタワー

深夜の盛岡駅前に人影はほとんどなく、東北特有の底冷えする空気が晩秋というよりむしろ初冬のものだ。守門は久利緒神社で強引に借りた車を西口の送迎車スペースに乱暴に着けると、黎と阿夜を伴って建設中の高層ビル「ドーンタワー盛岡」に向かった。地上四十階、高さ二百メートル余の、完成すれば東北でも随一となる超高層建築だ。落成直前とはいえ、その周囲を白い防護壁がぐるりと取り巻いている。阿夜は息を弾ませながら言った。

「お兄ちゃん、ここまだ完成してないんでしょ？　どうやって中に入るの」

守門は苛々と答えた。

「わからん。しかし、中に美春さんがいるのなら、どこかに入り口があるはずだ」

その時、黎が小声で囁いた。

「しつ。……あれを」

指差す方向を見て二人は息を呑んだ。中学生くらいと思しきパジャマ姿の少女が、身体をふらつかせながらタワーの周辺を歩いている。三人は気づかれないようそつと彼女の後を追った。やがて防護壁の目前までたどり着いた少女は、なんの躊躇もなくそのまま壁へ垂直に進み、するりと通り抜けた。阿夜は声を上げそうになるのをなんとか堪えた。

少女が通り抜けた辺りの壁は、ぼんやりと蛍光色に輝いている。黎は二人を促すように肯いた。守門は意を決し、阿夜を抱きかかえるようにしてその壁へと　壁の向こうへと進んだ。すぐに黎が続き、振り向いた時にはすでにあの不思議な光は消えていた。三人はあらためて少女を追おうとして、目の前にそびえ立つ禍々しいタワーの姿に絶句して立ち止まった。完成間近のはずのタワーはぐにや

りと歪んでいた。尖塔の部分は心もとなげに揺らめき、色さえおぼろげで、まるでマーブリングが墨流しの絵　　そう、ダリやムンクの絵画を彷彿とさせた。

我に返る頃には先ほどの少女はいなくなっていた。おそらく正面入り口となる大きな自動ドアに、守門は恐る恐る指先を伸ばした。驚いたことにドアは当たり前のように微かな電動音を立てて開いた。「行こう」守門の言葉に、阿夜と黎が後に続く。少女の姿が再び見えた。彼女は地階へ続くらしい螺旋状の階段を降りていく。夢遊状態であることは間違いなく、背後をつけている守門たちには気づく様子もない。十分ほど歩き続けたところで、阿夜は思わずつぶやいた。

「一体……どこまで行くの、あの子」

黎が言った。「地底の楽園まで、じゃない」

不吉な言葉に阿夜は顔をしかめた。

「やめてよ、黎」

しかし守門までがそれに同意するかのようにつぶやく。

「案外そうかもしれないな。地上から何階分降りてきたと思う？」

まともに考えたら地下五十メートルはあるぞ」

「地下鉄を通すなら妥当ですけどね」

黎の軽口に守門は皮肉な笑みを浮かべた。

「黄泉醜女よもつしめでも乗せようっていうのか？　悪趣味だな」

不意にその足がぴたりと止まった。守門の翳すペンライトの光が人影をとらえたのだ。阿夜は喉の奥で悲鳴を押し殺した。守門は彼女を後ろ手にかばいながら相手の姿を探った。初めに口火を切ったのは黎だった。

「どうやらここが黄泉比良坂よもつひらなかの坂本みたいですな。もっとも、神話とは上下が逆ですが」

闇の中の人物がこう返すのが聞こえた。

「では、そちらが伊賦夜坂いふやなかというわけですね」

聞き覚えのある男性の声。守門はペンライトをしっかりと相手に

向けた。そこに浮かび上がったのは美春の父親で葛原家現当主の武人<sup>けと</sup>だった。

「あなたは……あなたが、なぜここに？」

守門の問いに武人は淡々と答えた。

「なぜだか深夜、胸騒ぎを覚えました。美春が私に助けを求めていると強く感じたのです」

哉子が金精神と精神同調したためかもしれない。そして彼はさらに言った。

「このタワーの建つ場所からはかつて本物の御神体が出土しています。より正確に言えば、久利緒神社に祀られているものと対になる神像、ということになります。それはおそらく、いま美春とともにあるはずです」

守門は武人をじつと見つめ、言った。

「とにかく急ぎましょう。操られてここに集められた少女たちも心配だ」

## 第九章 対決

四人の追跡行は無言のまま続けられた。十メートルほど先をピンク色のパジャマがふわふわと揺れ動いている。この螺旋階段の終点はどこにあるのか　コンクリートの壁は無限の如く地底へと連なっていく。そんな中、武人は唐突に切り出した。

「諸橋さん、私はあなたに言っていないことがある。美春は　あの子は、私の子どもじゃないんです」

階段を降りながら守門は後ろを振り返った。初老の郷土史家は、疲れたような笑みを小さく浮かべた。

「葛原家は女系家族だと言ったでしょう。……巫女の血筋なんですよ、正確に言えばね」

守門は肯いた。うすうすそうではないかと思っていたことだ。

「私は無神論者でね。その私かなぜ、巫女の末裔である苗子と結婚したのか、こればかりは神のみぞ知る、というやつですが。知り合った時、彼女には未婚で生んだという娘がいた。当時すでに二つだったか……それが美春です」

守門は口を挟まずにいた。武人の表情は懺悔をする罪人つみびとそのものだ。

「私はごく普通の父親として接してきたと思っています。ただ……あの子は成長するにつれ、より苗子に似てきて……いや、それ以上に葛原の娘らしく育っていった……私には、なんだかあの子が空恐ろしく感じられる時があった。もちろん親として愛しています、愛しているんですが……」

「美春さんに婿を取らず、家を継がせなかったのはそのためもあつたんですか」

「……ええ。この家はいつそ潰れてしまえばいいとさえ思いました。それが美春のためだとも。あの子はごく普通の家に嫁ぎましたが、結局馴染めずに戻ってきました。……あの子は、葛原の家の持つ長

年の呪縛のような、得体の知れないなにかに縛られたままなんです。だからこそ今回もこんな……こんなことに」

その時、守門のすぐ後ろについて階段を下る阿夜が言った。

「お兄ちゃん……いまなんか人の声みたいなの聞こえなかった？」

「えっ……」

不意の言葉に守門は焦って前方に視線を凝らした。最後尾に行く黎が代わりに答える。

「確かに聞こえた。先生、そろそろ近いかもしれませんよ」

何メートル降りてきたのか、一体地下何階に相当するのか、もう誰にも把握することは不可能だった。突如現れた踊り場から横へ反れて続くフロアへと侵入する。真っ暗な、なにもない空間だ。ペンライトで前方を翳すと、フロアの端を過ぎる白いスカートが一瞬視界に入った。呼ばれた少女の一人に違いない。四人は彼女を追って走り出した。やがてフロアは異様な広がりを見せ始めた。それはつい先刻、久利緒神社で体験したあの空間のようだった。

上方から青みを帯びた光が差し込み、どこに道があったのか、四方から数人の少女たちが集まってくる。皆、部屋着やパジャマ姿の十代の女の子ばかりだ。意識はないはずなのに、中には不思議な旋律を口ずさんでいる者すらいる。異様な光景に阿夜は身震いし、守門の背中にしがみつく。

「ここ……ここが終着地点なの？ 美春さんは……？」

「そうだ、美春は？ あの子はどこにいるんだ」

武人が身を乗り出し、やみくもに手を伸ばした。そして助けを求めるような目で守門を見上げた。

守門はフロアを端から端まで とは言っても異界と化したこのフロアに明瞭な境端など存在しなかったが 見渡した。阿夜は再びつぶやいた。

「お兄ちゃん、美春さんは……」

「金精神がその依坐よりましとして真に欲しているのは美春さんだ。久利緒神社の祠にあった御神体……あの木棺はいわば雌雄の雌、の方なん

だ。さつき葛原さんが言っていたとおり、対になる御神体はここに  
戻ってきたはず……だからこそあの祠は奥宮と呼ばれていたんだ」  
「つまり、本当の神殿は、このタワーってこと？ でもなんでわざわざ別の場所に……奥宮扱いにしてまで」

黎が短くつぶやいた。

「ここにあつたらまずい理由があつたんじゃない？」

「え？ どういうこと」

それに答えたのは武人だった。忙しなく目を動かしながらもまだ  
その声には冷静さが残っていた。

「そうです。……史書を紐解けばわかることですが、この西口の一  
帯は昔『<sup>けが</sup>気枯れ地』として人々から避けられるべき場所だったよう  
なのです」

守門がそのあとを引き継ぐ。

「そうか。だからそこにいた神をそのまま祀るわけにはいかな  
い。表向きは巻堀から勧請したことになっているが、しかしこの場  
所を無視するわけにもいかない。その折衷策が、ここを社のない本  
殿とし、別の場所に奥宮として久利緒神社を建て、そこでもうひと  
つの御神体を祀るって方法だったんだろうな。久利緒には仮の本殿  
を設置して、いわばダミーを置くことで社地のバランスを取ってい  
たのかもしれない」

斎王宮司は真の御神体に宿る神が邪悪な性質を帯びてしまってい  
ることに気づき、その存在を畏れていたのだろう。そのため守門に  
対しても歯切れの悪い　というよりなにかを隠しているような対  
応しかできなかったに違いない。

そして、その雄となる御神体は、他でもない葛原家の当主が代々  
管理してきたものだ。雄だけならば美春に変化は起きなかった  
かもしれない。しかし、美春は雌の御神体に遭遇してしまった上、  
彼女の巫女としての資質は、皮肉なことに葛原家の歴代の女たちの  
中でも頭抜けていた。

「なぜ葛原さん、あなたの家で管理しなければならなかったんです



？　いくら特殊な家系とは言っても、皆が神職に就いたわけではないでしょう。現に美春さんもあなたも……」

武人は苦々しげに笑った。

「戻ってきてしまふんですよ、あの神様は。いくら神社に託してもね。それで仕方なく　というのもなんですが、そういう慣習になつてしまつたようです。それを諸橋さん、あなた方に言わなかったのは、神の居場所を他者に教えること自体が禁忌とされているからです……　いま思えば、そんな禁忌など私が気にするのもおかしい話ですがね」

「そしてその雄の御神体は、おそらくいま……」

「ええ。美春の手にあるのでしょうか。……　御神体などはどうでもいい。私はあの子を取り戻さなければ」

その言葉が終わると同時に、生暖かい突風が吹き渡った。四人ははつとして前方を見据えた。台風の目にも似た、黒い大きななにかが、風の中心で荒々しく渦巻いている。その周囲に直立不動する少女たち。武人が低く呻くのが聞こえた。

「あ……　あれだ。あれが、美春を呼んだ……　あの子をずっと苛み続けるものだ」

守門は無意識に阿夜を引き寄せ、その肩を強く抱いた。阿夜も震えながら守門の身体にしがみついた。

「お兄ちゃん……」

「あれが　金精神の実体か」

守門は唇を舐めた。想像を絶する禍々しさに足が竦みかけていた。しかし、武人はふらふらとそのものへ近づいていく。

「神よ……　あなたが信仰を、依坐を欲するなら、その贄<sup>にえ</sup>には私がなろう。だから……　頼む、美春を解放してやってくれ。葛原の血からあの子を解放してやってくれ、お願いだ」

黒く渦巻くものがじわりと武人に迫った。これ以上の接触は危険だ。守門は彼の腕をつかんだ。しかし、武人はそれを振り払ってさらに一歩、前へと進み出た。

「私は神を信じていない。それはいまも変わらない。だから私をど  
うしてくれてもかまわない。だが、美春だけは……あの子だけは返  
してくれ。あの子はもう自由になっていいんだ、あなたからも、葛  
原の血からも！」

武人は頭を垂れた。その時、ごく微かな声が　周波数の合わない  
ラジオのノイズから拾い上げられたような声が、断片的に聞こえ  
てくるのがわかった。

「……さん……お……う……」

「美春……美春か？　美春だな、どこにいるんだ！　美春！」

武人は立ち上がり、声の主を求めて彷徨うように歩き出した。

「お父さん……来ちゃ、だめ……危ない……」

「美春！　姿を見せてくれ、お願いだ！」

「葛原さん！　それ以上近づいちゃだめだ！」

武人は守門の制止も無視し、両手を広げた。我を失したように仁  
王立ちになって怒鳴った。

「美春！　ここへ来るんだ！」

次の瞬間　美春は突如現れた。黒い空間のどこから落下して  
きたのだ。彼女は武人の眼前に落ち、横たわった。阿夜が細い悲鳴  
を上げる。武人は半狂乱になって彼女を抱き起こした。

「美春！　美春、目を開けてくれ！　美春！」

背後から黎の張り詰めた声がした。

「先生、金精神は巫女ごとこの空間を呑み込む気ですよ。ここは一  
旦退かないと、ぼくたちまで……」

「ああ、わかってる。しかし――」

守門の額を汗が流れ落ちた。逃げなければやられる。だが、この  
世ならぬ場所からいますぐ逃げ出すことが果たして可能なのか？

それに、金精神に呼ばれてしまった少女たちを見捨てて？

「美春……美春、目を開けてくれ……美春」

守門はいまだ意識の戻らぬ美春を見た。彼女の左手には、警棒ほ  
どの大きさの、見慣れぬ黒い物体が握られていた。それに気づいた

らしい武人が、憎しみのこもった声で唸った。

「こんなもの……こんなものが……」

彼は娘の手からそれをむしり取り、床に叩きつけようと思いい切り振り上げた。寸前に守門が彼の腕を押さえた。

「その黒銅……神像を貸してくれ！」

守門は武人から神像を奪い取ると、それを美春の胸元に置いた。すかさず叫んだ。

「吐菩加美 依身多女……寒言神尊 利根陀見……」

黒銅が熱を帯びたように赤く光り始めた。乾いた音を立てて四方が罅割れていく。驚いた武人が手を伸ばし、美春の上から払いのけようとする、その直前。

「……波羅伊玉意 喜余目出玉！」

守門の声が止むか否か、神像が砕け散り、真っ白な閃光が辺り一面を埋め尽くした。あまりの目映さに、その場にいた者はみな上体ごと目を伏せた。轟音、爆風が巻き起こり、国津神そのまくにつかみまの凄まじさをもつてめちゃくちゃに荒れ狂い、やがて去っていった。空間に完全な静寂が訪れた。守門はそろそろと身を起こした。

「阿夜……阿夜、大丈夫か」

彼は咄嗟に庇い寄せたままの阿夜に声をかけた。彼女はゆっくりと顔を上げた。

「お兄ちゃん……ど……どうなったの、一体」

青白い光が消えてしまったため、周囲は漆黒の闇でなにも見えな  
い。守門は再びペンライトを点けた。そこは常世でも黄泉でもない、  
おそらく飲食店のテナント用に造られたただの地下フロアだった。  
前方には金精神の制御を失った少女たちが倒れている。しかし、お  
そらく時間が経てば意識を取り戻すだろう。

「どうやら助かったみたいですね」

黎が微笑んだ。守門は大きく息を吐き出した。「……ああ」

## 第十章 ふたたび、久利緒神社

社務所に設けられた四畳半の和室に哉子は寝かせられ、その枕元には襦ねぎ宜らしき若者が座っていた。午前七時半。夜はすっかり明け、神社を囲む森のそこかしこから、鳥たちの朝の営みの声が聞こえてくる。

「ご苦勞様。君は少し外してくれ」

齋王宮司は部屋に入るなりその若者に言った。彼は肯くと立ち上がり、社務所を出て行った。入り口ですれ違った守門たち一行に不審な眼差しを向けながら。

宮司は守門らを招き入れ、着座を促した。そして切り出した。

「このたびは、本当に……お疲れ様でございました」

守門は軽く礼を返す。「いえ。ところで、彼女　小宮山君ですが」

「ええ、眠っておられるだけです。ただ、精神的な負担はやはり大きいでしょう。よければお目覚めになるまでは、何日でもこちらでお預かりをさせていただきますが」

宮司の申し出は有難かったが、守門は首を振った。

「いえ、本日東京に戻る予定ですから。もちろん彼女も連れて帰ります」

「そうですか。……そうですね、ここにはいない方がいい。あれに……たのむ幸様に魅入られてしまった方ならなおさらだ」

「サイワイサマ？　それがあの丸い木棺みたいなものの名前なんですか」

守門の隣で正座する阿夜が訊ねた。宮司は肯いて言った。

「はい。あれは元々、例の、葛原の家の守り神だったそうです。ずいぶん昔のことですが、当社を建立するにあたり、当時の当主の妻という人が持ち込んだそうです。詳しくはわかりませんが、どうも

自分のそばには置きたがらなかったそう。それで供養を兼ねて御神体のひとつとして祀ることにしたとか。しかし、変化<sup>へんげ</sup>するところを見たのは私も初めてのことです。伝承としては伝え聞いておりましたが」

「なるほど。『サイ』は『サヘ』の転化と考えれば、おのずと生殖器から派生した呼び名であることがわかりますね。現在、本殿とされている社殿で祀っていたあれは？ やはり黒銅　西口付近で出土した本当の御神体の代わりということでしょうか」

「はい。そうしなければ幸様が鎮まってくれない、と聞きました。どういう意味なのかわかつてはおりませんでした、このことは社外の人間には決して口外するな、というような不文律がありまして……ご迷惑をおかけいたしました」

宮司は深々と頭を下げた。阿夜にはもうひとつ引つかかることがあった。

「ねえお兄ちゃん。結局、あの女の子たちはなんだったの？ どうしてこ、金精神はあの子たちを呼んだの？」

「私もはつきりとはわからないが、美春さんがここで幸様に出会って覚醒したために、その余波が及んだってことじゃないかな。金精神　金勢大明神が夜な夜な少女を襲うって話をしただろ？ 淫情のエネルギーというか、そういうものに呼応して惹きつけられたとでもいうか……金精神は彼女たち自身になにをするわけでもなかったし、呼んだというよりはむしろ、自ら出向いたと言った方がより正しいのかもしれない」

自ら望んで地底の楽園に出かける王女たちのように。阿夜は肯きかけ、もう一度訊ねた。

「じゃあさ、その子たちってほんとに処女だったの？　ていうか哉子さんてやっぱ……」

守門は顔を赤らめて言い捨てた。

「だから、私に聞くなって言ってるだろ！」

黙ったまま彼らのやり取りを眺めていた黎が噴き出した。

哉子の目が覚めたのは午後四時過ぎのことだった。一旦戻って宿をチエックアウトしておき、それから守門、阿夜、黎はずっと彼女に付き添っていた。その間に守門の携帯が鳴った。短い会話のあと、彼は晴れやかな顔で振り返った。

「病院の葛原氏からだ。美春さん、特に怪我もなかったらしい。意識も戻ったそうだ」

阿夜は顔をほころばせた。そして対照的に眠り続ける哉子を不安げに見遣った。

「こっちの眠り姫はまだ起きないのかな。ねえお兄ちゃん、キスして起こしてみたら？」

守門は顔を真つ赤にして怒鳴った。

「ば……なにを言うかと思えば。そんなことできるわけないだろ、しかも非科学的だ。口吻の接触と覚醒にはなんのつながりも、根拠もない」

守門の滑稽とも言えるせりふに黎はまたも噴き出し、おかしくてたまらないという風に声を押し殺して笑い始めた。その隣で唇を尖らせる阿夜。

「非科学的って。それを言ったらお兄ちゃんの専門って大体非科学的なことですよ」

守門は腕組みをして首を振る。

「ばかなことを言うんじゃない。考古学が非科学的だって？ 埋もれた古代の遺構や発掘品に現代的かつ科学的なアプローチを試みるのが考古学の真髄だ。迷信の入り込む隙間なんか一ナノメートルもない」

黎は我慢し切れず声を上げて笑った。あるいはその声が届いたのか、哉子の瞼がゆっくりと開いた。



## 終章

まだ夢でも見ているかのようにぼんやりと頼りない哉子を気遣いながら守門は「はやて」に乗り込んだ。行きと同じく完全指定席のため、阿夜は黎とともに自分たちの座席へと向かった。阿夜を窓際に座らせ、自分も浅く座席に腰掛けた黎が訊ねた。

「そういえば阿夜、携帯は？ 充電済んだの」

「あ、うん。……そうだ。お兄ちゃんからのメール、まだ見てなかったんだ」

旅館に戻ってすぐに充電器に差しておいたので、ようやく使えるようになったのだ。阿夜はバッグから携帯を取り出し、なぜか緊張を感じながらメール画面を開いた。

送信元：お兄ちゃん

本文　：阿夜、さっきはごめん。ちょっと嫉妬してしまったかもしれない。気をつけて、楽しい旅を。

どきり、と阿夜の心臓が鳴った。携帯を閉じ、バッグに仕舞って、その鼓動は収まらない。

「阿夜？ 先生、なんだって」

黎に声をかけられ、思わず肩が跳ね上がる。

「え？ 別に……楽しい旅を、って」

「ふっん。それだけ？」

阿夜はどきまぎと笑った。「うん。それだけ」

黎はそれ以上訊かなかった。その時、タイミングよく近づいてくる人影があつた。自分の席に荷物を置いてから移動してきたらしい守門だ。

「阿夜。ちょっと話があるんだけど、いいかな」



彼の言葉に、阿夜はおとなしく肯き、デッキへと出た。つい昨日もこんなことがあった、と阿夜はしみじみ回想した。もう何日も、何ヶ月も前のことに思えるのが不思議でならない。

「行きの新幹線では喧嘩したよね、こういうところで」

阿夜はくすくすと笑った。あの時は、まさかこんなとんでもない旅行になるとは思ってもしなかった。

守門は、わざとらしく咳払いをすると、おもむろに切り出した。

「あー……ええと、ひとつ、気になっていたんだが」

「え？　あ、そうだ！　あたしももういつこ思い出した。ねえお兄ちゃん、あの時お兄ちゃんが使った呪文ってなんだったの？」  
先手を封じられ、守門はやや鼻白んだように答えた。

「呪文？　……ああ、あれは鎮護詞だ。祝詞の一種だよ」

「鎮護詞？　それがあの金精神の弱点だったの？　それをお兄ちゃんは知ってたの？」

「いや。正直、まったく勝算はなかった。ただ……昔、山際教授に聞いたことがあったんだ。世界があつて言葉があるんじゃない。言葉が先にあつて、世界があるんだと」

折口信夫によると、延喜式祝詞（平安時代中期に編纂された格式「律令の施行細則」のうち、巻八に掲載されている祝詞のこと。全二十九編所収）の中には三種類の祝詞が存在し、そのうちのひとつが「鎮詞・護詞・鎮護詞などと書かれるいはひごと」だという。そして次のように続けている。

「其で鎮詞は、大抵の場合は、土地の精霊が、自由に動かぬやうに、居るべき処に落ちつける言葉になつてゐる。即ちいはひ込めてしまふ詞である」

つまり「いはひ」という言葉には、端的に言うと、身のまわりを清める　浄化の意味が込められているのである。そして守門が使ったのは、その「いはひごと」の中でももっとも効力があるとされ

る天つ祝詞　折口曰く、「これを唱へると、不思議なことがあらはれてくる」とされている　「あまつのりとの太のりごと」なのだ。

「ふうん……」

阿夜にとつては謎掛けのような話だ。納得がいくようないかないような面持ちの彼女を守門はじっと見つめた。その真剣な視線に阿夜はたじろいでしまう。

「ど、どうかした？　お兄ちゃん」

「右耳……ピアスが外れてる。……そうか、あの時、君が助けてくれたんだっけな」

守門はそつと阿夜の耳朶に触れた。哉子とともに幸様の餌食になりかけた彼を間一髪で救ったのは、阿夜が着けていたアメジストのピアスだった。阿夜は守門の手に自らの手を重ね、言った。

「でも……なんであれで助かったのかな。あたしは投げただけで、なにもしてないのに」

「ついている石のせいさ。それは紫水晶だろう、君の誕生石の」

阿夜は驚いて守門を見た。

「お兄ちゃん、あたしの誕生日とか誕生石とか、よく知ってるね」

「……まあ、付き合いがそれなりに長いからな。石は発掘物と縁が深いものだから自然に知識が身についたんだ。」

古来、水晶には穢れや魔を祓う力があると言われてるし、それにあの時は、君がピアスを投げるのに合わせて西行君が不動明王の真言を暗誦してくれただろう。それでより強く効果を発揮できたんだろうな」

阿夜は感心したように大きく肯いた。

「そっか。黎には申し訳なかったけど、でもお兄ちゃんたち助かってよかった」

「え？　じゃあそのピアス、西行君から？」

「うん。昨日、お土産物屋さんで買ってくれたの。誕生石だからって」

阿夜は少し淋しげにつぶやいた。守門は思わず言っていた。

「それなら、私が新しいピアスを贈るよ。命の恩人だからな」

思いがけない言葉に阿夜は瞠目したが、含羞んだように首を横に振った。

「ありがと。……でも、いい。これは黎がせつかくくれたものだし」

「そうか。そうだな、彼がいるのに私がそういうものを贈るのは変だし、彼に悪いな」

守門は肯いた。どこか空虚な心持がしていた。それを振り切るように彼はもう一度本題に入ろうと、口を開いた。

「それより、阿夜」

「ん？ なに」

自分を見上げる無邪気な瞳に気圧され、守門は一瞬目を逸らしたが、それでもやめなかった。ずつと気になっていたことだった。

「つまりその　どうしてメールに返事をくれないんだ？　送ったのは昨日だぞ」

「……ああ。違うの、実は電池切れちゃって……ばたばたして、充電するの忘れちゃった。お兄ちゃん、メールくれてたの？」

咄嗟に阿夜は嘘をついた。そのメールなら先ほど確認済みだというのに。

「充電切れ？　そうか……じゃあまだ見てないんだな」

守門はどこかほっとしたようにつぶやいた。阿夜はきょとんとした表情で彼を見た。

「見たらまずいの？」

「いや　別に、そういうわけじゃないが」

守門の顔が心なしか赤く染まって見えた。阿夜は笑った。

「変なの、お兄ちゃん。ねえ、東京に着く頃あたしお兄ちゃんたちの席まで来るね。一緒に帰ろうよ」

「え？　おい、阿夜　」

守門の返事も聞かずに阿夜は駆け出し、黎の待つ席へと戻った。そのまま話していたら、自分もきつと赤面してしまいそんな気がし

ていた。照れる理由などないはずなのに。

黎はひじ掛けに腕を寄せ、頬杖をついて眠っていた。相変わらず、人形のように整った寝顔だ。

「……阿夜？」

人形の目が開いた。欠伸をひとつすると、申し訳なさそうにつぶやく。

「ごめん。送っていつてあげたいんだけど、なんか思ったより疲れちゃって……東京駅でお開きでいいかな」

「え、そうなの？ そっか、うん、いいよ。今回大変だったもんね」  
黎は微笑み、再び目を閉じた。守門の懽然とした顔が思い浮かび、笑いをかみ殺していた。

これはサービスですよ、先生。

午後八時過ぎに新幹線は東京駅へと到着した。その頃には哉子の調子も快復したように見え、そこで所用があるから、と短く告げて彼女と別れた守門。黎も守門に短く挨拶をするとホームを辞去した。守門は地下鉄ではなく山手線乗り場へ向かった。阿夜も彼について歩いた。なぜかいつになく別れ難い気がしていた。

「店へ寄って行こうかな」  
ガルシア

階段を昇りながら守門はぼそりと言う。阿夜は慌てて彼を追い、その左腕をつかまえた。

「あたしも行く！」

「君は帰りなさい。もう遅いんだぞ」

「お兄ちゃんだって明日から仕事でしょ。大体あそこはあたしの職場なんだからね」

「まったく、口ごたえばかりだな」

「お兄ちゃんこそ、子ども扱いしないでってば」

言い合いながらも二人はいつの間にか笑っていた。阿夜は心の中

でこつそりつぶやいた。

嫉妬って、兄として……って意味だね。

新宿駅東口を出て徒歩五分。

懐かしい「カバレ・ガルシア」の灯りが見えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6015j/>

---

奇神譚

2011年5月23日17時10分発行